

昭和十年四月十日印刷納本
昭和十年五月一日發行（每月一回一日發行）

淨土

五月創刊號

法然上人鑽仰會發行

大正大學教授 大野 法 道 著

法然上人

不拔なる信仰への道！それは巨人法然上人が説き且つ行つた道である。そしてこの道こそ現代日本を率いて立つべき日本精神へと通じてゐるのだ！！

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してもものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その條々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない。

定價拾五錢

(送料二錢)

四六判七十頁

總ふり假名付

美麗なる繪畫表付

發行所 法然上人鑽仰會

法然上人鑽仰會員には、部

數の多少に不拘、一部十錢

東京市芝區芝公園明照會館内
電話芝(43)一三五二・八四〇
振替東京八二一八七番

徳本行者

中野善英氏著

四六版上製
八十餘頁
總ルビ付
定價廿錢
送料二錢

何ものにもたじろがず、ゆるがず、直往邁進する莊嚴な信仰の姿！ これこそ狐疑し逡巡し勝ちな現代人の日常生活に一つの光明を指示するものだ。

驚くべき肉體と精神との苦行を通じて開かれた行者の言動の一つ／＼が讀者の迷ひを開いて行く、加之著者の懇切で含蓄ある説明は最も良き信仰指南である。

信 仰 本 讀

中村辨康氏著

四六版 七十六頁 總ルビ付

定價 廿錢 送料 二錢

信仰とは？ 佛教とは？ 徒らに言葉を弄する勿れ、信仰を玩ぶ勿れ！ 簡潔に、明朗に、しかも懇切に書かれた本書は、繁雜をさけて真一文字に正しい信仰への道を開いて見せる！ 再讀、三讀！ いよ／＼日常生活の光明となる。

近刊豫告

藤本了泰氏著

江戸と増上寺

第三輯

石井教道氏著

聖 岡 上 人

第四輯

佐藤賢順氏著

行 誠 上 人

第五輯

定價は發行の都度發表します。

大衆的信仰雜誌の隨一

淨き園

一部二錢
一年卅錢

増上寺出版部

東京市芝區芝公園
振替東京一五四五四
電、芝43四四五・四四六



淨土 五月號 目次

・表紙・扉畫……………井上正春

信話 きたれ・光の中へ……………眞野正順(二)

問題への解結 **眞の淨土**……………文學博士 椎尾辨匡(二六)

法然上人への思慕……………岡本かの子(八)

三つの聖樹……………翁久允(一一)

親子……………松浦一(一五)

「元祖」の意味……………高瀬承巖(四〇)

上人傳に關して……………佐藤春夫(四二)

極致の 劍と禪と念佛……………結城令聞(一六)

信仰相談……………(五四)

信念の 人々を語る……………中山先生……………武田泰淳(二〇)
偉人を作る母の愛……………てんぼりの清作……………岡本俊一(二三)

上人の御うた「月影の歌」諸家評釋……………(三八)

姉崎 正治 相馬 御風 上田 萬年 白鳥 省吾
佐藤 春夫 宇野 圓空 松浦 一 辰野 九紫
小笠原長生 曾我家五郎 德山 璉

こころの糧

一枚起請文講義 第二回

浄土宗教學部長

中村 辨康

(七一)

女性のために

佛弟子中の一女性……………

芝園 輝一……………(三〇)

念佛の家を訪ねて

増上寺の百日結集道場……………(四〇)
佛教修道院の話……………(四九)

五月の大事件
文明開花物語

特輯

読み

もの

意味

子育て吞龍……………

大谷 梅庵……………(五〇)

モア 茶房娘ユリコ……………

北林 透馬……………(四四)

首縊り
緋談

往生繪卷……………

(青柳喜兵衛畫)

十一谷義三郎……………(六〇)

家庭の衛生……………

醫學博士……………吉原リウ子……………(五六)

隨思華……………

中村辨康・新田……………(三七)

法然上人鑽仰會に就て……………

佐藤賢順……………(八〇)

編輯後記……………

(八二)

浄

土

五月號

(第一卷 第一號)

佛教聖典を語る叢書

全拾
五卷

絶讃裡配本濟

近刊

佛所行讃
松岡讓

- | | | | | | | | |
|-------|-------|---------|---------|---------------------------|-------------|--------|-----------|
| 一、華嚴經 | 一、阿含經 | 一、觀無量壽經 | 一、立正安國論 | 一、觀音經 <small>附法華經</small> | 一、一枚起請文と歎異鈔 | 一、維摩經 | 一、佛教經典を語る |
| 宮島資夫 | 友松圓諦 | 佐藤春夫 | 室伏高信 | 岡本かの子 | 倉田百三 | 武者小路實篤 | 山邊習學 |

卷を遂ふて好評湧くが如く之によつて佛教の現代的表現の標準は漸次定まり一般民衆の心境の中に佛教思想の萌芽は愈々芽生えつゝあり。

各巻 金一圓五十銭
申込 金五十銭（最後巻分中へ充當）
一時拂 金二十一圓
送料十二銭—

内容見本送呈

淨 土 五 月 號



世に超えし
彌陀の誓は
ますらをの
ますらをぞ知る
限りなき
彌陀の恵みは
わが如き
痴れ者もうく
南無阿彌陀佛

(春
夫)

信 仰
講 話

き た れ、 光 の 中 に

眞 野 正 順

月影のいたらぬ里はなけれども、眺
むる人の心にぞすむ。 法然上人。

△ある商店主の話

このあいだ、或る商店主が來まして、色々噂話をした末に、ふと、

「陰徳を積んでゐる人は、どこか落附をもつて暮してゐますね」

と云つて感慨深さうな顔をしました。聽いて見ますと、
「忘れもしません。一昨年の大暴落の時でした。私共の同業は皆んな大あふりを喰つて周章狼狽してしまひ、私なども大いに慌てゝ、あちこち走廻つてゐたのですが、ふと往來で同業の一人の男に出逢ひました。こんな時ですから、

何より先きに私は

「君、どうする」

と急込んで尋ねますと、其男は一寸私の顔を見て
「仕方がないさ、遣れる事だけやるさ」

と云つて微笑しました。その落ついた微笑が何處となく私の心を打つたのです。今まで沸えたぎつてゐた淵の中から、ふと離れて、なんだか廣い所に出たやうな氣がして、私もあまり慌らずに靜かにこの混亂の對策を立て、ゆく氣になりました。お蔭でどうやら大した怪我もなく切脱けることが出來ましたが、後になつて「彼奴はどうしてあんな落附をもつてゐるのだらう」學びたいものだ、と、注意して其男を見るやうになりましたが、別段どこと云つて異つたところは無いのです。たゞ、何時もよく人の世話をした

り、見えない處で心掛の善い事をしながら自分では知らん顔をしてゐるだけが異つてゐるのです。どうも、この陰徳が彼に奥床しい落附を興へてゐるらしいのです。それで或日その事を尋ねて見ますと、其男は「そう言へばそうかね。とにかく多少なり自分は人の爲に盡してゐると思ふと、人間は安心してゐられるものだね。自分の困つた時、誰か來て助けて呉れるとは思はないけれど、何んだか、かう目に見えないものが自分を包んでゐるやうな氣がして、安心してゐられるね」

と云ひました。やつぱり、然うだつたのです。人間は、何か目に見えぬ大きなものに信念を持つてゐなければ、安心した生活は出来ませんね」

私は、この話を聞いて大變面白く思ひました。

△いつも、怖れてゐる

この社會は表面から見ると和かに見えますが、よく考へて見ると油斷のならぬ世です。世間によく、急に會社を蹴首になつたり、一家の杖柱を喪つたりした人達の悲惨な話は、耳には聞いてゐますが、さて、自分達がそう云ふ運命

に出會したとしたら、どうでせう。「自分は其用意が出来てゐる」と言ひ切れる人は實は少ないのではないですか。多く私達は危い綱を渡つて生きてゐるのです。

考へて見れば、私共が、とにかく、この社會に斯うして安穩に生きてゐられるのは色々な力が突つ張り合つて自分を支えてゐるからです。一の商店にしましても、店にある商品、資金の融通、華客の状況、信用の連鎖、自分の生立等、いろ／＼なものが突張り合つて一の商店を生かしてゐる。ところが、その支えの一つが急に外れたら、さあ大變です。忽ち店はぐらついて来る。

これを佛陀は「すべては縁によつてある」と云つてゐられます。色々な「縁」に依つて私共の生命は支えられてゐる。縁が亂れると、たちまち自分は傾きかゝる。

ですから、この自分を此社會の中に維持して行かうとする私達には、何時もどこかに不安を伴つてゐます。安心しきつた生活ではない。絶えずどこかで怖れてゐる。迂濶な眞似をしやせぬか、飛んだ災難を引當てやしないか。そうして自分の「支え」を無くしはせぬか。たえず、不安の想

ひに壓されながら日々精を出してゐる。情ない話ですが、自分で自分が生きてゐるのではない。不安が自分を促して働かしてゐる。

つまり、こゝにある小さな自分を守るために、絶えず波々として「縁」にはかり氣を取られてゐる。今の自分の状態は失ひたくない。少しでも好い事があつたら他人に占められる前に自分が取つておかぬといけぬ。そのためには、すべてを出来るだけ甘く緩なして行かねばならぬ。こんな風にして、社會の中に身を守らんとする間に、おのずから自分に小さな殻をつくり、其内から首を出して己れに都合のよい外部の力にのみ目を輝かし、内部の心は絶えず不安に戦きながら次第に狭く暗く、強き力の前には卑屈となり弱き力には冷酷となつて、偏つたトゲ／＼しい自分に變つてくる。

半夜靜かに首を垂れて、つく／＼と我が半生を思ひかへせば、あの明朗な青年時代から、何時知らず、卑屈となり冷酷となつてしまつた自分を、淋しく思ひ返すことはなかつたですか。かうして輕薄な自己となつて來たことも、ひ

たすらこの関合ふ社會の中に身を護らんとするこの「小さな胸の戦き」のした事なのです。

然し、かやうに戦きながら護つて來た自分も「縁」が大きく揺れて、今まで頼つてゐた支柱が、がたりと大きく外れ、ばもう駄目です。忽ち呆然自失してしまふ。先の話の大暴落に遭つた商人達の狼狽がそれです。普段「コセ／＼と目を光らせてゐるだけに、大きくガタリとなれば、もう手の下す所を喪つてしまふ。そうして果ては再び立上る氣力もなく、身も心もあげてクサツてしまふ。——つまり背負つてゐた殻と一緒につぶれてしまふのです。

△己れを越えてゆく

このやうに、社會の波に揉まれながら、知らず／＼自分の小さな殻をつくり暗い卑屈な然も危ない生活をしてゐる。それが私達の大半です。然しこんな小さな自己は突破つて、もつと廣い明るい世界に出てこねば、本當の生活ではありません。

自分と云ふものが「色々な支えによつて生きてゐる」と云ふことを、もつとよく考へて見る必要があります。色々

な環境や運命が自分を支えて、自分はかうして生きてゐる。この支えは決して、縛つたり縮こませたりするものであつてはならない。支えは自分を生かしてゆく爲のものです。ですから、この境遇の上に乗れ出で、これを支配し生かしに行く。それが人生の本當の道でなければならぬ。

それなのに、日常の私達の生活は「支え」に氣がとられて、逆に「支え」に縛られてひきずられてゐる。それと云ふのも、自分の心がこの目前に在るこの小さな自分の利害に閉ぢこもるからです。小さな自分を中心として、あたりを見廻して打算をしてゐるとき、人は知らず／＼狭い暗い世界に逐ひこまれる。

人はこの小さな自分の殻を維持するために生きてゐるのではなくありません。よく生きるために生れて來てゐるのです。この自分の姿は、やがて、自分が生きて行く道具に過ぎません。

ですから、自分が本當によく生きた時、後から思ひ出しでも心を躍らすやうに、好く生きた時は、いつも、この小さな自分の殻から乗り出して潑刺として生きてゐます。事

業の中に精一杯、白熱的にブツかつたとき、心の底からこみ上げて來る感動に動かされて、快く友の苦難を助けてやつたとき、そう云ふ時の自分からは、平常の自己の殻はかき消えてゐます。たゞ、胸にこみ上げてくる強い生命の力に生きて、己れを忘れて生きてゐる。

然し、かう云ふ時こそ、實は、かへつて、自己をよく生かしてゐるのです。自己に集るあらゆる「縁」はびち／＼と生氣を脈うつて、すべて生き返つて來、平常の心づかひであつた事業の成否利害を問はぬ心になりながら、然も、何處とも知れぬどつしりとした安心に身は包まれる。つまり、本當の大きな生命の道に觸れて來たからです。

人は、小さき自己を守らんとすれば、却つて暗い坑道に陥ちて、押し迫る周囲の岩石に絶えず戰いてゐねばならぬ。この小さき殻を突破つて、より廣き生命の道に來たとき、はじめ、自己を生かし、境遇を生かし、搖ぎなき安心の世界に對面することが出来る。

自己を超えて、大いなる生命の中に身を托する。それが「信念」の生活です。「信念」なくて、人は眞に生きる事はでき

ない。」とはこの理であります。

△佛の中にある生活

大いなる生命は常に私共の頭上に横はつてゐます。私共は、たゞ、この小さな殻を突破つてそれに参すればよい。然しながら、私共の心は絶えず、小さな自分を追ひ、それにひきずられてゐる。

月影のいたらぬ里はなけれども

眺むる人の心にぞすむ

月の光は皎々として、野越え山越えいたらぬ處もなく、照り輝いてゐますけれども、私共は常に小さき自我の中に閉ぢこもつて暗い不安の生活をたどつてゐる。暗きは人の罪であつて、月の罪ではない。

然しながら、かく思ひつゝも絶えず小さき自己へと追ひこまれて来るものが私共の生活です。この激甚な社會の中に、私共は日々の利害打算の應接に心うばはれて、其上にのり出で、それ等の全部を生かしてゆく大きな生命の道にきたることを忘れてゆく。思へば、かうして大生命に参することが眞實の生活であると知りつゝも、猶ほ、それが

自分の利害打算の評量に當つて來ねば、自ら身を動かして眞實の生命に向つてゆかうとしない。

「絶えず佛を念じてゆく生活」とは、即ち、こゝに與へられた唯一の活路です。佛はこの大いなる生命が醇乎として我等に向ひたまふ姿、われらの小さな固き殻を刺し貫いて輝いてくる光です。

われ等は絶えず佛の御名を呼ぶ。呼ぶことによつて絶えず光は己れにさし入り己れは小さき框より浮び出で、偉いなる生命の流れに入り、この小さき日常の姿はさながらに自ずから高められて光の中に融けてゆく。

「光明遍ねく十方の世界を照し、佛を念ずる衆生を攝取して捨てたまわす」(觀無量壽經)

輝く生命はたえず我等の頭上にある。光りに満つる淨土は既に其處にしつらへられてある。我々はたゞそれに入ればよい。絶えず、佛を念ずるときに、わが生活は、おのずから其限りなき生命の光に潤ふのである。

X X X X X

この社會生活に在つて、大生命を觸れその中に生きてゆく道は「念佛の生活」でなければならぬ。この「念佛生活」は東亞の幽玄なる哲理の根幹をなす綜大なる佛教が、その髓を盡した最後の結晶である。そうして夫れはこの日本人の手によつて拓かれた。

私共は、其誇るべき日本人たる「法然上人」の光輝を現代に再認識するために鑛仰會を組織して日々その事務に當つてゐるが、集める者は日々それ／＼の營務に於て念佛し、事務の操作が、そのまゝ佛を念ずるリズムたらんと期しておる。そうして大いなる光明の下に融けてゆく人々の心が、それ／＼事務の事件や葛藤をのり超えて、やがて、こゝに、かの光り極みなき淨邦を見るやうになりたいと念じてゐる。

この和やかな光は、遠く全國に越えて擴がり、そしてやがてそれは我日本が正に建設せんとする眞實國土の基礎とならねばならぬ。光はたゞ念佛の聲する所に現はれてくるのだ。

「わが遺跡は一處に留むべからず。念佛の聲するところ、即ちわが遺跡なり」(法然上人)



◆法然上人鑛仰會規約抜粹◆

●會 員

- どなたでも會員になれます。
- 入會申込書と會費年額金一圓とお送り下されば會員になります。
- 會員には雑誌「淨土」と會報「法然鑛仰」とが配布されます。
- 會員は其他いろ／＼な本會の特典が受けられます。

●支 部

- どこでも會員五名以上集つたら本會支部を作つて下さい。
- 支部の責任者と所在地と會員名を書いて送つて下さればすぐ本部に登録します。
- 支部は本會の活動の素となる細胞です。
- 支部では信仰座談會、研究會等を開き本部から講師の派遣が得られます。

●どんな事業をするのか

―刊行物―

△面白くて知らず／＼に信仰が得られる大衆雑誌「淨土」月刊

(一部金拾錢 會員一ヶ年金壹圓)

△機關誌「法然鑛仰」月刊

(一部金五錢 會員無代配布)

―出版物―

文藝家の手になる大衆讀物「法然上人」・學者の手になる平易な「法然上人の信仰」・其他有益な刊行物。

―催 物―

「法然上人劇」大劇場にて華々しく上演・各地に於ける「大講演會」・「法然上人鑛仰大展覽會」・着實眞剣な「信仰座談會」・「研究會」・等、其他機宜に應じて大日本の淨土化に全力をそゝぎます。



法然上人への思慕

岡本かの子

私は近頃、紫式部の信仰を調べる必要があつて平安朝の浄土思想を探つてみた。この偉大な女流文學者は晩年阿彌陀佛の信仰により安心立命を得て西方往生を期した。その事は式部自身、日記の中に記してあるから間違ひはなく、且、晩年のみならずつと前から浄土思想に深く涵養されるところがあつた爲めに、あの絶妙な藝術的情緒が潤はされたであらうことも亦、想到するに難くはない。

ところで式部の信仰の環境をなす當時の佛教界の有様をみると思ひの外に浄土教の勢力が強い。しかし其の勢力の強さといふものは形式的や教權的でなく、實質的、内容的である。

つまり日常生活の利益や靈驗は他教によつて需めるが、いざ生死といふ人生の根本問題に觸れて來ると多く彌陀の西方浄土を念ずる

といふ有様だつた。それ故今から見ると随分妙に思はれる信仰様式が行はれてゐた。例へば法華經を受持する功德によつて彌陀の浄土を期するとか、或は釋迦、藥師の造像起立の報勳によつて極樂往生を適へさして貰ふとか、およそ筋違ひ、矛盾に感ぜられることが、普通に行はれてゐたやうだつた。つまり專修の念佛でなかつた。そういう難修的のやり方でも兎に角、彌陀憧憬の風は滔々として人々の精神界に流れ、世に時めく儀禮佛法、社交佛法の影を避けて、眞摯な花を咲かせてゐた。

當時「聖」と稱される一群の遁世者があり、遁世する事を「聖」といふ流行語が出来た程で、世人から羨望の眼を以つて見られてゐたのは心の趣くまゝに此の眞摯な花が培へる境遇だつたからであ

る。しかしそういふ聖たちでも難修の風は同じ事で、これはもう少し後の事ではあるが、「棚原聖」といふ人の如きは經典も誦せず佛號も唱へず、ただ西に向つて方丈に坐つて居る、それが極樂往生の近道だとするやうな變つたのがあつた。

平安初期以來、淨土教は内容的にそれほど人々の心に強く流れた大きな川であつたとは言へ、その信行は上述の如き難修の混濁を帶び、かつ、いくつかの宗派に分れて煩瑣、疏荒に堪えなかつた。それを念佛一行、口誦專修の河容に改漑、統一せられた法然上人の宗教的力量は推し測られないほど偉大なものである。

私たちは上人の垂訓を讀み、餘りにしばしば口を極めて難修の排除に努められてゐるのをみて、これ程にせられずともと思ふことがある。しかし、これは淨土思想と念佛との關係が既に整理し盡され、殆ど自明の理の如き形にして與へられてゐる。今時の私達が感ずる感想であつて、上人時代、既往三百餘年の難修の因習の深さの前に立つならば此の感は絶對に起らないであらう。實に當時に於て此の事業をせられたのは、大河の流れを一臂の力に依つて決せられたやうな大努力であつたのである。私は平安朝

笑つてゐる魚

朝 倉 文 夫

私は釣りが好きでよく出かけますが、決して怒つてゐる魚は釣りません。笑つてゐる魚ばかり釣つて來るのです。無理をしないで釣り上げた魚は笑つてゐますが、無理をして釣つた魚は怒つてゐます。さういふ魚を釣る人は釣道の邪道ですな。何處で解るかかつて？それは魚の表情にちゃんとあらはれてゐます。

の淨土教の狀態を知るに及んでつくづく上人の思想的勇姿を思ひ泛べた。

次に私が法然上人に感謝してゐることは、上人の迷ひの間が長く思想を定められて立宗開教せられたのは、早熟早老の習慣があつた當時に於ては、寧ろ老年に數へらるゝ四十歳以上の時であつたことである。上人は長壽で八十歳以上までも在世され立宗開教以來、普通人の一生涯に價する歳月を用ゐられて、あれだけの救世濟民をせられたのであるが、若しも上人にして日本人の平均年齢ほどで示寂されたなら甚だ心元ないものがあつたであらう。長壽それ自體、上人の大器晩成を證するものであるが、上人は幼時から慧悟、天才型の方でありながら、而かも四十過ぎ

まで宗教的求道搜索に彷徨せられたといふ事は、如何にその志が高く、いゝ加減なものでは満足せられない性質であつたことを證する。眞の意味の大器晩成型であられた。これにつけて自分の事を言ふのはおかしいやうだけれども、私も宗教に歩みを入れてから、眞の安心立命を得られず、あれやこれやと随分右往左往した。その爲め意外な廣さを漁つたことは望外の僥倖であるが、しかし「さすら

ひ」は辛いものである。まして、精神的生命の死活問題に係る「さすらひ」は骨身にこたへる。私は歎きのあまり、自暴自棄に陥らうとし、懷疑の谷にうづくまり宗教を白眼視しやうとした事さへあつた。そういふときに慰められたのは、然上人の決定の遅かつた事である。(餘の大宗敎家の決定は多く二十代、三十代であつた。)

「上人の如き慧悟の方にして四十以上まで選擇に時日を費された。

まして、まだ若く且つ拙い自分である。

努むべきである」と、私は思つた。

かういふ意味で感謝されたといふ事を若し上人が聴かれたなら、恐らく苦笑され憫笑されるであらう。しかし、

事實私は此の點でどのくらゐ慰められ

たか知れない。しかも今、私は何人に

も早く安心決定して上人の斯る點に慰

められずに、もつと上人の本筋の宗教的なものに慰められん事を祈

つて止まない。

上人が宗教家として中に鋭く勁いものを藏しながら人間としての手帳りが春の海の如く寛いで、びやかなのは、私が他でしば／＼述べたところである。氣品があつて美的情操の體であつたことは詠ぜられた和歌によつても判るが、上人の文そのものが既に一個の平明

詩 一 つ

佐 藤 春 夫

うらやましきは人ならず

西方の寶池にありて

あそぶてふ鶯鶯なれや

鳥の身もうへ

妙法をぞ説けりける

南無阿彌陀佛

な散文詩である。私はごく卑近な世俗的の疑ひの間ひに對し、同じく卑近な列に降つて通俗に答へられてゐる上人の問答體のものに却つて驚くべき雄勁で艶美な詩のリズムを發見して讚嘆措く能はないのである。淳美の人は何物をも醇化せずには措かない。

私は善き意味の厭世感に現實生活の墮落を批判し、思想の低劣を排除して、良好の理想を迎へ入れる精神的準備工作をなすものと思

つてゐる。勿論、上人の宗教は一方、

光明主義ではあるが、一方かなり此の

準備工作にも力を入れられてゐる。今

日、上人の光明方面と共に、後者の方

面にも學ぶべきものが多々あるやうに

思ふ。

上人は行業積るにつれ、三昧を發得

せられ、寶樹、寶池を、眼前に眺めら

れ、大地は瑠璃に化して眺められたと傳記に書いてある。この事は

別に信心獲得に直接關係なく、或は傳記者の迷信とする人が在るか

も知れないが、私は素直に享け入れ度く思ふ。要するに心、清淨を

得た人は現實をも美化して眺められる。否、現實は本質的には眞に

して美なのかも知れない。それは兎に角、いやしくも淨土思想を愛

するものは、その要素の一つとなつて居る美の價值、憧憬の價值に

も重要な注意を拂ふべきものと思ふ。



三つの聖樹

翁 久 允

印度ばかりでなく原始民族間には古來樹木崇拜の風習があり、日本でも古代生活から神を表徴する樹木が尠くない。しかし、佛教徒にとつて、忘れることの出来ない聖樹が三つある。それは印度特有の木で、日本人には見たこともない木だつた爲めに、種々文學詩歌の上で美はしい空想的樹木となつて、いつの間にか樹木そのものよりかその名に依つて表徴された文字に華麗な樹木を冥想するやうになつた。その三聖樹とは、釋尊物語の第一日に來る無憂樹である。

無憂樹

約二千五百年前の卯月八日、佛母摩耶夫人が出産の爲めカピライ

城から故家に歸られる途中、ルンビニ園まで辿りつかれると、急に産氣づかれた。そこには大きな無憂樹があつた。その下で夫人の右脇から菩薩が誕生された。寅刻であつた。菩薩が誕生されると間もなく四方を各踏むこと七歩、手を以て上下し、之を指して、——四維上下唯我最尊——と仰言つた。と言ふ傳説である。

私は、ネパール王國のそのルンビニ園に辿りついたのは、二月十五日であつた。大雪山に近い高原だから、寒くはあつたがそれでも日本の四月頃の氣温だつた。翌朝自動車で荒廢の跡を探ぐる爲め出かけたのだが、茫々たる平原の間に、川や草叢や森や農家があらちにあつて、遙かなるヒマラヤが雲表に聳へてゐる光景に、冥想が二千五百年の昔へと飛ぶのであつた。先づ無憂樹が頭に浮んでくる。美はしい寶車上の摩耶夫人、園には紅白の蓮華。そして誕生佛。そ

の美はしい舞臺のやうな幻想が、車からおりとと幻滅の廢墟に立たされた自分だつたが、發掘された記念堂の傍に、天を摩して樹つてゐる木があつた。あの木は何と言ふ木かと案内者に言つてもわからなかつた。私は無憂樹（アソーカ）を探したが、それらしいものもなかつた。たゞ土人の案内者がモンキーアツブルだと言ふ木の林の中で林檎の形をした堅い皮の木實を拾ひながら、嘗つてルンビニ國榮へし頃の名残りを思はせる池の周圍を廻りながら、當時の國の美景を頭の中で描き直してゐた。無憂樹！無憂樹！さう呟きながら、物語と現實の間に二千五百年の星霜が隔つてゐることを考へてゐた。

菩提樹

この樹は印度の方々で見る樹だつた。ブタガヤの有名な菩提樹は案内者の話に依ると、三代目で、世尊が、尼達禪河で六年間の苦行の垢をすゞぎ玉ひ、河原を渡つてこの村に辿りつかれ、十二月八日の曉の明星と共に廓然大悟されたと言ふのである。これからこの樹が佛教徒崇拜の的となつたが、樹そのものは、なんでもない熱帶國に繁茂する喬木である。ブタガヤの現在の聖樹は四五十年位もたつたものが、幹は信徒の寄進に依つて、黄金で塗られてあつた。根に

は毎朝、ブタガヤ聖地の所有者マハント氏が牛乳を供養するので、葉は普通の菩提樹よりかつやくしてゐた。その下に金剛寶座があつた。

靈鷲山の岩上にも一株の菩提樹があつた。世尊が法華經を説かれたとき、その樹下から獅子吼されたのださうだが、それも何代目の菩提樹か、現存のものは二三十年位の大きさだつた。この山は鋭い大きな一つの黒い岩石からなつてゐるが、その岩石の中へ大きな藤のやうに延ばしてゐる菩提樹の根が、岩を割つてゐた。冬風夏雨二千年五百年、この山の變化も思はれた。そして祇園精舎には阿彌陀菩提樹と言ふのがあり、これは、ブタガヤ初代の聖樹の枝をもつて來て植ゑたもので、本當の菩提樹の分身だと案内のビルマ僧が説明してゐた。それから佛誕生地で逢つたセイロンの巡禮者が同島のカンデイにある菩提樹こそ本當の分身で、この聖樹を見なければ佛跡巡禮の話にならぬから、是非やつて來いと誘はれた。其他街路の並樹にもマンゴーや榕樹などに交つて、菩提樹はその根を大地に思ふまゝ張らしてゐた。

沙羅双樹

二月十五日、クシチガラ城、拔提河の畔に立つてゐた沙羅双樹の間で、佛陀は、枕を北にし顔を西に向けて、涅槃に入られたと言ふのが。無憂樹下で呱呱の聲をあげられてから八十年の後である。

佛陀伽耶の菩提樹下の成道は莊嚴に満ちた繪巻物であるが、この

沙羅双樹下の涅槃は更に圓熟した莊嚴な靜寂美である。その沙羅の樹は今

も拔提河畔に鬱蒼として繁つてゐると

思はれるのだが、行つてみると河らし

い河もない。尤も雨期になつたら、流

れるであらうところの川底があつた。

その川底に満々たる河水を流して、さ

て時ならぬに満開したと言ふ沙羅双樹

の花を描いてみるのだが、花も樹もそ

れらしいものがなかつた。

要するに無憂樹でも菩提樹でも又沙羅樹でも、印度の山や野原に普通繁茂してゐる樹木に過ぎないものらしい。私なんかは植物の智識がないからわからないのだが専門家が行つたら何處でも發見し得られるものだらう。が、その植物學的な立場からでなく、宗教的文

佛教を國際的宗教に

岩井 智海

日本の佛教は實に偉大なものであります。これは國際的宗教にまでならなければならないものです。然し佛教聖典はキリスト教の聖書の様に、國際的にひろめる大きな充實した機關を持つてはおりません。これは非常に遺憾なことでありまして、もつとも良い聖典を廉價に、充分に民衆に供給すると云ふことは、私達佛教徒の重要な使命であると思ひます。

學的にこの三つの聖樹が東洋人の佛徒に無限の詩味と哲學味を與へるのである。そして佛跡を巡禮して、これらの三聖樹に對して研究して來たものが渺らしく、それでゐて、この三つの聖樹が絶えず、ある靈感を以つて巡禮者達の心臓に迫つたに違ひないと思ふ。

「俱會一處」のよろこび

法然上人にかしづいて、まめに働く阿波の介といふおろか者があつた。ある時、上人ある門人に向ひ

「阿波の介の申す念佛と、私の念佛と

どちらがまさるか」

とかけられた。門人は返答に困つた

が

「どうして師の御坊の貴い御念佛と一つにすることが出來ませう」

と答へた。それを聞くなり上人は顔色をかへ

「さては日來、淨土の道に何を聞いて居られたるぞ、あの阿波の介

も佛たすけたまへと思ふて南無阿彌陀佛と申す、源空も、佛たすけ

たまへと思ふて南無阿彌陀佛と申す。さら／＼變りのないものを」

と強く認められた。實に、念佛で人は皆一所になれるのだ。



親 子

松 浦

一

私が或時硝子屋を呼んで障子の硝子の破損したのを直させた時のことでした。一枚の硝子にはほんの僅かばかり破損した處がありました。それも氣になりますので、硝子屋に序に取替へて置いてくれろと申しますと、硝子屋は好い返事をしてくれません。さうして

硝子に情愛がうつつてゐます。世に恐ろしい力は愛です。愛する心は正しく利害の外に働く。利害の外に働いて相手のものと一つになり、そこに相手に對しての實感が湧いて來ます。いたはり、愛し、敬する心、「勿體ない」の感情はこゝから滑らかに流れ出します。

この位ぢやまだ勿體なう御座います、と申します。それでも氣になるから、と再三申しましたので、澁々取替へて行きました。私は取替へさせはしましたが、それでも硝子屋のその氣持を本當に嬉しく又有難く思ひました。硝子屋としましては硝子一枚を取替へてもそれだけの利益はあります。唯利益づくで行きますならば、自分の方へ掻込んでゐても、少しでも仕事を多くして行きたがる所でせう。ましてや序のことです。けれどもこゝに思はずひらめき出したものは職人の利害を忘れた心です。「勿體ない」この心が彼の人

の利害の念を打ち潰した槌でした。硝子屋は日々硝子に親しんで、人と人との繋りが、人と物との繋りが、人と一切との繋りが、かういふ側から見られて來ますと、「情愛がうつつる」といふことをよそにしては、相手のものと一つになる心持は讀めないものと思へて來ませう。絶對者たる佛様を相手に取つて言ひます時でも、假令こちらには痴人でも、凡夫でも、佛様に情愛がうつつてゐるといふことならば、佛様との繋りは眞實の實感で成就されてゐるでせう。その愛で手繰り寄せ、佛様は痴人ならば痴人のまゝに、凡夫ならば凡夫のまゝに、御引取り下さいます。それが念佛衆生攝取不捨です。念は思

ひを明らかに固く一所に繋ぐことです。それ故に念佛とは思ひを明らかに固く佛様に繋ぐことです。又その自然の發動たる稱名のこともなります。この時この念が實感を引き起す處まで行かぬものとしたならば、それはどんなものになるでせう。死物に終るばかりです。脱殻であるばかりです。念は實感を呼び起します、さうしてその實感は情愛がうつつて成るのではありませぬか。佛様が攝取してお捨てにならぬ念佛の衆生とは、佛様に情愛をうつすことの出来る凡夫です。それならばその情愛を佛様にうつすことがどうして凡夫に出来るやうになるのでせう。それは何よりも一番答へ易い間なのです。何故子供が親に情愛をうつすことが出来るのでせう、と尋ねる人がありませうか。教へずとも子供にこの情を動かさせるものは親の愛です。生きて成長の一路を進む子供の生命の源泉となる親の情です。生死無常を徘徊する人の親子の間にさへこの疑ひなき事實があります、まして不滅の生命の國で萬物萬靈の親となる佛様の大悲に育ち、そこに情愛をうつし得ぬ佛子がこの世にあり得ませうか。あり得るのは人間社會の世界を以て凡てと思ふ間のことで。生死流轉

信仰は釣鐘をつくやう

故道重大僧正

信仰は釣鐘をつくやうなもので、巧劣はこちにあるが、鐘のなるのは同一である。學問や智慧や才覺ではない。至心に一向不亂の一心專念にやればよいのであります。信仰の境地は實は「冷煖自知」と申して人に問はず、人に話せず、問はず、語らず、聞かず、話さずのものじやから、信仰を語つたり、聞くより本當は自分が先づ實地にやるより外はない。

の世の中で人の世界の底がぬければ、大き御親の御佛の御手に託け込むそれ等の人も自らに見るでせう。「佛心とは大慈悲是れなり」——佛様の親の愛とはこの大慈悲と呼ばれるものです。

正しき服裝

服裝を正しくすることは、心を正しくすることである。否な、心正しきが故に服裝も正しと見るべき意味もある。

松平伊豆守信綱は忠誠謹直の士であつた。出仕の際は勿論、自邸に在つても決して裏附の袴などは着なかつた。問ふ者あれば答へて云ふのであつた。「人の心は服裝によつて變るもの、出仕して心に恭敬を存せぬのでは、忠誠を致すと思ひもよらぬ。それには先

づ以つて衣服から氣を付けて、恭敬を忘れぬ心得が大切である。餘人は知らず。自分においては、斯くしなければ忠勤もしかねる。服裝を正しくすると云ふことは、服裝を美にすると云ふのと大いにちがふ。現代人は如何？ 男が俳優の如く、女が娼婦の如く下女が奥様の如く、競うて美衣美食を纏ふ。これは服裝を正しくするのではなくて、却つてこれを猥らにするものである。服裝を猥らにするは即ち心を猥らにする所以、歎すべきかな。



劍と禪と念佛

結 城 令 聞

一

劍と禪との關係が極めて密接であることは、劍禪一致などといふ熟語がある位であるから誰にでも常識的に理解せられてゐるのである。故に劍と禪との關係は、此處ではただそれだけに留めて置く。然るに劍と念佛と云ふ言葉は如何にも不似合な感じがするのであるが、然し事實は然うではなく、劍と禪との關係が密接である如く、劍と念佛との關係も亦極めて緊密な關係を保つてゐる。言ひ換へるならば、念佛の信仰が何等かの形を取つて、實に根強く日本武士の魂にまで喰ひ込んでゐるのである。

二

江戸の文化華やかなりし文化文政の頃、江戸荒井町に心形刀流の達人が住んでゐた。その人の姓名は残念ながらわからないのであるが、彼に常靜子劍談一卷、劍攷一卷の兩部の著述が残つてゐるのであつて、劍道に對する其の人の見識は、幸にもそれらの書物によつて知ることが出来る。彼は單なる劍客ではなく、大學頭林衡と交りがあり、又闇老松平伊豆守と筵席を共にした人だと傳へられてゐるのであつて、餘程身分のある幕臣であつた様である。のみならず學問を皆川淇園に受けた人であつて識見も隨つて頗る高く、劍は伊庭家二代目の伊庭是心齋秀原の高弟水谷權太夫忠辰の弟子鷲齋の弟子であることがわかる。兎に角、身分もあり學問もあり、腕

もあつたところの人であつて、一介の劍客としてしまふのは惜しい人である。心形刀流と云ふのは伊庭是水軒が神道流より獨立して稱した流名であつて、其の獨立は元祿頃であるから、文化文政頃には新進の勢を以て當世に臨んだものであり、武術流祖録と云ふ書物には「後に工夫して心形刀流と號す、子孫は東武下谷に住して其の藝を傳へ家聲を墜さず」と稱してゐるから、その盛んなりし状態が想像せられる。然るに此の心形刀流の劍の極意は、否更に適確に云ふならば、常靜子の劍談及び劍致を見るに、此の書の著者は阿彌陀佛の信仰を生き／＼と劍道の極意中に取り入れてゐるのであつて、ともすれば消極的であり退嬰的であると云はれる念佛の信仰を、實に積極的進歩的に劍の生活中に體驗してゐるのである。然も彼の念佛の信仰は、法然上人の選擇集によつたものであり、又、増上寺念佛僧正の日課念佛訓に依つてゐるのである。

三

法然上人は念佛行者の心得をお諭しになつて「念佛を信ぜん人はたとひ一代の御のりを、よく／＼學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩におなじくて、智者のふるまひをせずして」と教化せられてゐる。善導大師は

「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫」と述べ、親鸞聖人は愚禿と名乗つてゐる。常識的に考へると愚と云ふことはどつすらぬことはない。然し淨土門の信仰に於ける愚の自覺は、これ程深刻なものはない。何とならば愚の自覺、即ち機の深信なるものは、必ず法の深信に裏附けられてゐるからである。罪の自覺は絶対の佛力に攝取せられた救ひの如是相であるからである。親鸞は「自力作善の人はひとへに他力をたのむところかけたるあひだ彌陀の本願にあらず」と稱してゐるが、淨土門の信仰に於ては、自己をたのむと云ふことは絶対の禁物である。劍道に於ける破綻も此の自力作善、即ち己れを買被ることより起るのであつて、常靜子は此の點に於て大いに淨土門の信仰に打たれたのである。

四

常靜子劍談の著者は、永昌寺の等潤和尚から聞いたことであると稱して徳本と云ふ人に關する次の如き話を載せてゐる。今その文章を引用すると次の通りである。

等潤和尚(永昌寺)の話せしは、徳本は徳業具足せし人なり素と紀州の農夫の子にして、廿六歳にて出家せしかば學問せし人にも非ざるが、農の時より精進不臥にて念佛し、夫より

難行功を積みしより、何事も問ふに従つて心に發す、或日某が申せしには、何れの人其御事を惡しく申せしと云へば、徳本それは何人何事をか申せしと云へ、云々と告げたれば、即ち合掌して誠に忝き事よとて其人を回向す、因て奈何にして回向するやと問ひたれば、これは我彼れに昔し惡業ありし報ひなり、然ればかゝる事を聞くぞ、罪障を滅する也、誠に忝なしと云ひし、これ忿怨の心起るべきを、還て善報を爲す事歡ばしき事よと、等潤云ひしにて、予は又劍術を悟れり、我敵より打たれたるとき、尋常なれば悲るべし、我は然らず、この技の敵に打たるは己が不形なるか、又は貪る所あれば必こゝに敗する道生ず、云々。

或は又彼は「わざの迅きを心がくる者は、己を頼むが故に還て遅し、必ず其法に依つて爲す者は其わざ不迅と雖遂に迅速をなす」と稱してゐる。即ち劍に於ける破綻は自己の不形、或は貪り、換言すれば己を頼むところより生ずるのである。此の我念を捨て、教のまゝに信順するところ此處に必勝の劍が存すると云ふのである。心形刀流の劍は、總て此の精神を實踐するのにあるのであるが、直接に淨土門の教理に依つて其の劍の極意としてゐるものに、三心刀と云ふ劍がある。

五

三心刀に關する記事は劍攷中にあるのであるが、此の流で云ふ三心刀と云ふのは觀無量壽經の三心、即ち至誠心と深心と回向發願心の精神をそのまゝ劍道の精神としてゐるのである。要約して其の意味を云へば、至誠心とは眞實心のことであつて、淨土往生を決定と念佛の一行を勵むのが至誠心である。此の念佛の一行は、稱へてもくも、法然上人の教化にもある如く「我等の分」の念佛ではない。信する心も念ずる心も悉く佛の御はからひであつて露塵ほども凡夫の想念は交つてゐない。全く己れを空しくした念佛である。此の體驗はそのまゝ劍の境界であつて、常靜子は之を「眞實は何ぞと云ふに、右にて敵の刀を拂はんの、左にて切らんのと我念を起さず、刀教の有る如くにして、此の刀教を能く守りて眞實にさへすれば勝つなり、我念を捨て去つて此心を體に保て行ふを三心の初心とするなり」と稱してゐる。次に深心とは、深く本願を信する心であつて、自身は何一つ取りどころのない極惡人であるけれども、阿彌陀佛はかゝる極惡最下の機を救はんが爲めの本願成就の佛であるから、我身は地獄一定であるが佛力によるが故に往生決定と深く信する心であり、同向發

願心とは吾等が所修の行業を、一向に往生淨土の爲めの回向となすのであつて、更に他の爲めになすのでないことを意味してゐる。常靜子は、此の深心と回向發願心とを右手短刀と左手長刀との用としてゐるのである。即ち右手の短刀は敵を切る刀にあらず我を切る敵刀を承け過むる刀なりとして他念を用ひないのである。若し他念が間雜して此の刀にて敵を撃たん等とするときには却つて吾身を害すと戒め、之を深心の



刀と爲し次に左手の長刀は敵を撃突する爲めのものと
して、右手が敵に
應ずると
き、左手の長刀が
何の念も

なく、一筋に往生を願ふが如く敵を刺突するのであつて、此の時に若し敵の左を切らん、或は右を打たん、或は何れに應ぜんなどと思はゞ、即ち却つて敗を取る機となると云ふのである。要するに三心刀の極意は、疑心なく、必定の憶に住し、然もそれが我念を離れてゐる境地の行爲を意味してゐるのであつて、常靜子は劍の究極するところ帶刀無用論を唱へてゐるのであるから、三心刀の極意に達するとき、命なき刀そのものは問題でなくなる。故にそれは、法然上人が念佛と云ふ行爲には必ず三心が具足してゐなければならぬ、三心具足の念佛を強調せられたのと同じ精神に立つてゐる。劍も念佛も共に實踐であり、體驗であるから、體驗の世界より云へば、念佛の三心と三心刀とは必ずや一致する何物かが潜んでゐると思ふ。それは又文字の上より云へば、淨土門の信仰は弱きものの信仰、愚たものの信仰と云つた様に考へられてゐるけれども、その弱は世間の強弱を超越して何物よりも強き弱であり、その愚も亦人間以上の愚であり、所謂無碍道の姿でなければならぬ。それは此處に喋々するまでもなく、法然上人を始めその門の人々の實際的生活歴史なるものが雄辯に物語つてゐるのである。

中華民國の建設者 中山先生

武 田 恭 淳

中華民國の生みの親とも云ふべき孫中山先生が畢生の大事業の遂上で惜しくも逝かれてから今年はまさに十年になる。三月十二日には中華民國は申すにおよばず日本でも盛大なる追悼會が行はれ、東洋の青年達が今なほ熱き誠心を先生にささげてる事を示した。

日本では孫文と言ひならはしてゐるが、支那では先生の號の中山といふのを一般に用ひて孫中山先生と敬稱してゐる。この中山といふ號はどうして出来たかと云ふと、それは先生が民國を建設するための政治運動に活躍してゐた時分、日本に亡命された事があつて、世をしのぶかりの名として日本名の中山といふ名を用ひたのがもととなつたと云ふ事である。此の號が日本名からはじまつた様に先生と日本とは切つてもきれない深い關係があり、先生が統率した民國建設のための政治團體の中には多數の日本人が加盟し、海をへだてた大陸の舞臺で死を賭して活動したものである。日本人でさへ此の危険な政治運動の中に

飛び込んで行くくらゐだから支那の青年達が水火を辭せずして先生の命にしたがつた事はもちろんであつて、今日の民國が出来あがるまでには正義に燃える青年の尊い血が實におびただしく流されてゐるのである。

此の様に日支兩國の同志のかぎりなき信頼を一身に集めた孫文とは一體どんな偉大な人であつたか？

先生の生れた頃、すなはち西曆一八六六年はまだ宗教を中心とした清朝政府反對の大一統太平天國の動亂がおさまつてまもない頃で、世の中はきはめて騒がしく、殊にその生地、廣東省は外國人の交通が多かつたため他の諸地方にくらべて知識が進んでおり、先生はしたがつて幼年時代から何時かは清朝政府を倒して立派な住みよい國をつくらうといふ志を抱くやうになつてゐたのは當然であつた。

十四歳の少年の身でホノルルに渡航し、先進國アメリカの文明の潮流にあらはれてます／＼知識をひろめ、歸國して醫學を



おさめるかたはら、香港・澳門の地方で大いに民國を創立して清朝を倒すべく同志を求め主義を鼓吹した。

二十九歳の時になつて海外で働いてゐる支那の移民・華僑の援助を得て興中會といふ團體をつくつた頃はしかしまだ一般の人は先生の偉大な考へを信用するものが少かつたのである。そして反對派の政府の人々は先生の事を強盗かなそのやうに悪口を云つてゐた。その上、日清戦争後の民心の不安に乗じて勇敢な同志達が廣州において旗あげをしたのが失敗して先生は日本に亡命し、さらに米國・英國と各地を歩きまはらねばならないやうな状態になつた。

十一日 (明治廿四年) 大津事件

露國皇太子殿下が縣廳を距る五丁程なる京町字小唐崎町カ番地屋敷津田岩次郎方まで來らせられり時、



と云ふことで無期懲後に處せられたが、この判決は有名な話題となつた。

北側に御警衛の爲め立番したる巡查津田三藏なるもの、(略)帶劍を抜き殿下の頭部を目懸けて斬りつけたるより殿下は人力車より左へ御飛下りあそばされ、露皇太子殿下の御乗車を曳き居たる車夫向畑治三郎が兇行者の足を取りて引倒し落ちたる劍を拾ひて後頭部を切り次で背部を切りたればその儘倒るゝ所を御先導の木村警部が飛びかゝつて、總を掛けたるが(同年五月十二日東京朝日)謀殺未遂

しかしながらいかなる苦難も先生をへこませる事は出来なかつた。「なんとかして支那の人民を幸福にしてやりたい」此の信念が火の様に先生の胸の中に燃えてゐたのである。有名な「三民主義」も實に先生の此の心の中の簡単な偽りのない強い叫びから生れたものであつた。

かくして先生等の不屈の精神はやうやく世人の共鳴するところとなり、一九一一年三月二十九日の廣州の旗上げは七十二人の同志の壯烈な死となつて失敗はしたけれども其の反響は全く清政府を土臺から揺り動かし、民國の成立はもはや火を見るより明かな事となつた。

新軍、すなはち漢人ばかりの軍隊は先生等の宣傳によつてその主義に賛成し、武昌に砲兵工兵等がまづ事を擧げて成功するや、其の他の諸省は全く草木が風になびくが如く先生等の旗下にはせまじ、僅か百日ばかりの間に共和政府が支那四億の人民の狂喜の中に確立されたのであつた。

しかも先生の眞價は此の苦難な亡命時代のみに發揮されたのではない。血を流す事が先生の目的ではない。世界の平和と人民の幸福。此の目的が達せられるまでは先生は一日も政治運動をやめなかつたのである。

革命は成功したやうに見えても各地に跋扈する軍隊の大將の中には新しい政府の正しい方針にしたがはないで自分勝手なや



りかたでやつて行かうとする者が澤山居た。哀世凱などといふ偉い人でもつひ自分の野心の爲に人民の言論機關である議會を解散させてもどほりの政府にしやうとたくらんだりした位であつたから先生の心勞はひとほりではなかつた。

ことに古くからの友人であつた陳炯明といふ將軍が謀叛をした時などは四面は皆敵方の兵士であり味方はただほんの先生の身のまはりの人々であつたが先生は少しも騒がず、「この謀叛をしづめなければ自分は國民に對して申しわけない。職務をつくして死ぬばかりだよ」と云はれて部下を勵まし、平氣な顔をして敵の兵士の間をくぐり抜けて軍艦に乗り込み、反對に叛軍を砲撃して事なきを得たのであつた。

南方がおさまるやただちに北方の軍閥をうちこらすために義勇軍をすすめたが、つひに病を發してなくなれたが、それは或る政府員が外交談判に臆病卑怯な態度をとつたのを非常に怒られて『不平等條約を廢除するのが私の目的なのにお前みたいな者は外國人ばかり崇拜してゐて此の私を歓迎するのか!』と叱られその感情が激したためであつたと言ふ話である。

先生にとつては死は何でもなかつた。死にいたるまで先生の胸中には淨土建立の明るい希望がみなぎつてゐたからである。

暴風警報

亂滿たる櫻花を一朝にして吹き散らす無情な春風は人間にも屢々無情である。突如捲起る一塵の風に帽子を取られて、滿目注視の中で帽子とランニングをやるなどは餘り感心せぬ……と云ふのは凡人の思想である。若し諸君がかゝる一事に出逢つたら、はにかんだり赤くなつたりしないで、いとも嚴肅なる顔付きをしてなるだけ大きな音を立て（奇聲を發すれば更に良し!）勇敢にこれを追跡すべきである。さすれば、兩側の通行人は一齊に自分の帽子に手を擧げるです。そしてそれによつて兩側に居並ぶ數百人の帽子は救はれ、警報を與へた君子は

は、その人々から感謝の眼差を受けるです。

レビウの説明は
むづかしい

子供を連れて寶塚のレビウを見に行つた。

『お父さん、あの男?』

女?』

良心的な父親

『女なのさ』

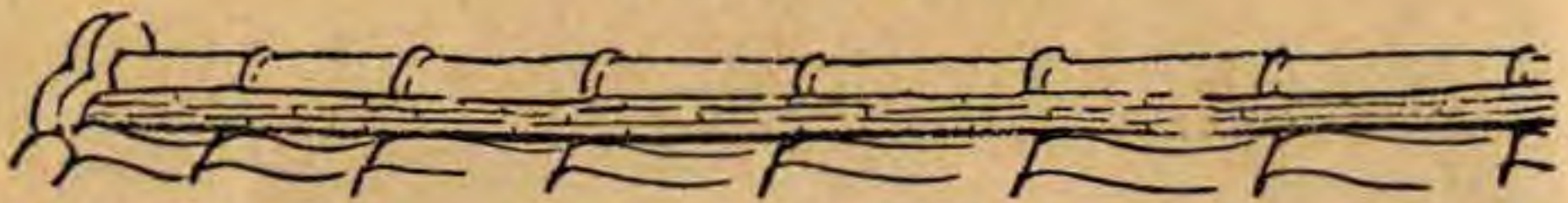
『女なの?』

「いや、女が男になつてゐるんだけれど、役は男だから男なのさ」

『じゃ、矢張り男なの?』

『女は女なのだけれども、男になつてゐるから男で、本當は女なんだよ』

『なんだか解らないや』



てんぼうの清作

岡 本 俊 一

「やーい、手棒！」と一人の腕白小僧が突然叫んでばら／＼と逃げ出すと、あとの三四人の子供達も一齊に「てんぼう！ てんぼう！ てんぼうの清作！」と一齊に叫んで、夕闇の街道を人家の方に一團りになつて走り出したが、五六間先で一度立止まるとふり返り様、また「てんぼう！」とはやし立て、今度

五月の大事件



十四日(明治十一年)大久保利通組尾井町に於て暗殺さる公は午前八時馬車にて裏霞ヶ關の邸を出でられ紀尾

井町一番地へ差掛る。爰は右の方には北白川宮の邸の後ろに當り左の方には華族壬生基修君の邸なり。降：早朝と云ひ空かき雲り今にも雨く若き男が手に花を持ち立止りて何か戯れ居るが(これが矢張り兎徒の一味であつた)：折しもあれより四人の男現れ出で(五月十五日東京日々)内務卿を駈者とを亂刀の下に切り倒して短刀で留めを刺した。兎徒石川縣士族島田一郎、杉本乙菊、長連豪、臨田功一、杉村文一、島根縣士族淺井壽篤はその目の中に自首した。

はまっしぐらに逃げ去つて仕舞つた。とり遺された目の美しい、白い額の愛くるしい十二三の小年は道の眞ん中に、しよんぼりと、逃げて行く子供達を見守つてゐた。何も云ひ返さない。罵詈雑言に答へると云ふ元氣は起らなかつた。「てんぼう？」は少年の最も痛い所を衝いた最も痛い言葉だつたから。「てんぼう」は嘲弄と同時に手傷い事實だつたのだから。

少年は何時迄も其所を動きさうになかつた。そのばつちりした眼はもう何處を見てゐるのでもなかつた。夕陽に一層くつきりと浮び上つた山々の頂きや、森影から這ひ出した夕闇に次第に黒ずんで行く繪の様に落付いた湖水も少年の目には映らなかつた。その眼は見る光りを失つてゐた。自分にも説明することの出来ない絶望観が突然この少年を捕へたのである。急に己れを取圍んで仕舞つた眞黒な闇の中にずん／＼引きこまれて行くのが感じられるばかりであつた。

……ふと我に返つた。その左手を、片方の手でそつと押へた



が、その手は丁度松の瘤のやうな一つの醜い肉の塊りであつた。どうにも仕様のない事實なのだ。と、少年は急に『うおう！』と大聲で泣き出すと、先刻の子供等去つと同じ道を何にかに追はれるやうにかけ出した。次第に濃くなる夕闇の中から少年の『うおう！』と云ふ泣聲が何時迄も聞えてゐた。

所は猪苗代湖に近い福島の一寒村である。

清作が泣いて歸つて来る際、母のしかは太い針がぢかに心臓に突き刺つたやうな思ひをする。この子は外の事では決して泣かない子だ。この子は何をやつても引けを取つたことのない子だ。この子を悲しませるたつた一つのこととは『てんぼう』と嘲られる時にきまつてゐる。

今、おもてから泣き乍ら歸つて來たのを見て胸のつまる思ひがした。どうして慰めてやつたら良いのか解らないのだ。だ、強い責任觀に責められるばかりだ。赤ん坊の時に、自分の注意が行きとどいてさへゐたら、この子が爐に落込んで、こんな片輪者にならずに済んだのだ。この子をもつと良醫にかける事が出来たら救はれたかも知れないのだ。この子は自分を恨むだらう。もう恨んでゐるかも知れない。物心が付けば付く程、私を恨むやうになるだらう。恐ろしいことだ。この痛ましい右手の外は、どんなことでも他の子供達よりずんと優れてゐる立

派な子なのに、いつもかう云ふいじめな思ひをさせるのは、自己のいたらなかつた罪である。それに飲んだくれのお父つあんには、この子の始終を見てやらうと云ふ氣は一寸も見えない。自分を置いて誰れが、この可憐な子供を一人前に仕擧げる者があるだらう。

泣き止んで、爐端にしよんぼり、うづくまつてゐる我が子の姿を痛々し氣に見てゐた母親に、一つの決心が啓示のやうにひらめいた。

『清作！』母は我子をひしと抱き緊めながら、『今日も學校の先生がお見えになつて、おまへを高等科に入れるやうすゝめておいてだつた。學校の成績は學校始まつて以來無いやうな立派なものだ、餉賣りなどして家計を助けながらあれだけの成績を擧げるのは大したものだと、おほめ下すつたよ。だから私もおまへを高等科にやるやうに決めたよ……』

少年はびつくりしたやうに、母親の顔をきよとんと見守るのだつた。

『そりや、うちなんかでおまへを高等科にやるのは骨の折れることさ。しかし學問は出来るだけしなければいけない。偉い人間になるのは學問が第一だ。偉い人間になりさへすりや悪口を云つた人間でも頭を下げて来るやうになるさ。私はおまへのためならどんな苦勞も厭はないから一所懸命勉強に精をお出しな



五月の大事件



た。太沽石臺の攻撃で日本軍が各國軍の前に腕前を
あはしたのは六月十七日であつた。

五月十三日には北京城内に暴徒蜂
起し多数の外人宣教師が殺され遂
ひに各國と戦端を開くことになつ

た。これから北清事變となつたが、
翌月十三日には北京城内に暴徒蜂
起し多数の外人宣教師が殺され遂
ひに各國と戦端を開くことになつ

二十七日 (明治三十三年) 北清事變起る

義和團の匪徒昨日蘆漢鐵道線に當る琉璃河を焼き壊

し、今日又京津鐵道線の豐臺を焼

き壊せり。保完北京天津間の交通

めに不通になり各國水兵を上陸せ

しめんとし帝國軍艦愛宕亦水兵上

陸の準備をなせり。(同年五月卅

日東京朝日新聞)

この「てんぼう」清作こそは、後に細菌學の泰斗として全世

○

さい。そして偉い人間になるのだよ。昔盲目で、目明きよりも
立派な學者になつた人があるぢやないか。さあ、近所の惡たれ
どもにかまはず、何もかも忘れて勉強するやうになさい。さう
すればおまへは誰からも指一本さゝれないやうになる。ねえ、
私もどんなに嬉しいことだらう。……解つたかい！ お母さん
は一所懸命で云つてゐるのだよ。」
清作は無言のまま、母親の慈悲の籠つた激勵の言葉に耳を傾
けてゐたが、やがて母から身を離すと靜かに疊に兩手を突いて
頭を下げた。その閉ぢた兩眼からは感激と決心の涙が迸つた。

界に令名をはせ、學界のあらゆる名譽を擡つたばかりでなく、
人類の恩人として渴仰された野口英世博士その人である。博士
に若し幼き日のこの母の愛がなかつたなら、あの世界的偉人と
しての出現を見ずにしまつたであらう。どんな逆境にあつても
ひるまず、どんな危険に遭遇しても恐れなかつた博士の燃ゆる
が如き研究慾は、實にこの温い母の手に培はれたのである。博
士が世界的名譽を擡つたときに、最も喜んだのは世界の何人よ
りも母しかその人であつた。と同時に、母に劣らず歡喜の叫び
をあげたのは、彼を昔「てんぼう」と呼んだ村人であつた。博
士が黄熱病の研究に一身を献げて、學者として最も名譽ある死
を遂げた時に、世界の何人よりも歎き悲しんだのは、矢張り彼
を「てんぼうの清作」とあだなした村人だつたのである。

五月廿一日は博士逝いて滿七年に當る。

「巨母」と云ふこと

近ごろ精神分析學の方面で「巨母」と云ふ語が用ゐられて
ゐる。英語の GREAT MOTHER の譯語であるが、つまり
幼時に於ける母の愛ほどその人の一生を強く左右するものは
ない。これを極端に押詰めると、母は子に對して、その生涯
のすべての支配者、學問の教師でもあり、遊び相手でもあり、
戀人でもあり、社會活動の源泉でもありするのだ。英國の現代
作家 D・H・ローレンスの長篇「息子と戀人」はこの「巨母」思想
を表現した好箇の代表作として屢々引合ひに出されてゐる。

眞の淨土

椎 尾 辨 匡



一、大自然の動き

物を以て観る人には物の羅列が世界となるが、それは切れぎれである。力を以てしてみる人は相引き合ふ蛛網の如きも尙外から縛つた連鎖に過ぎぬ。心として扱ふものには縁慮し相應する、その内面の合不合によりて正邪美醜善惡があるこれを求心的に内に探ぐれば主觀の明暗であるが、遠心的に外に展ぶれば客觀の淨穢である。即ち淨土は單なる物や力の世界でなくして心の世界であるが、心でも遠心的に求めらる、客觀的の淨界である。實に物と心とが對立するのでないから物を捨てゝ心を取るのでもなく兩者を調和したのでもない。淨き心を以て物を淨からしめたのでもなく、特に淨く見直したのでもない。物と思はれたもの自體が淨いのである。これ即ち天地の一切相が最も自然にその趣く所に趣ける姿であるから、法性界とも大自然界とも云はれるものである、が、決してそれは但理でも觀念でも磊塊たる萬物の集積でもない。實に生々と活き蠢々と伸び何等の缺漏もこたわりもない無漏無障の世界である。何處までも覺め覺め進み進みて息まざる生命界である。これ涅槃界とも佛國とも眞實土とも云はるゝ所以である。

法性無爲涅槃の世界として認められる、眞の淨土は何人も能く造り得るものではない、全く大自然の姿であるが、それが姿としては具體的な事實であるから色相もあり物質でもあり方相を云ふこともでき、個々差別する。そこには意識も情意の力作も、因果も縁報も考へることができる。故に法性の世界、常寂光土と呼ばれる淨土が連続せる果報として報土でもあり、又不完全なる有漏差別の考へ方に對應して現はる所には應化土、假設土でもある。既に報土として情意の世界であり、行爲の成績として認めらるゝが故に行爲の主體が考へられる、それは報身である。

言ひ換れば自然の中に人が現はれるので、人が自然を造るのではない、然し人も自然の進みで自然と別なものでない。只自我意識を恣にする時は不自然なる迷執の世界が成立する。人がその本然を完うする時、自然が人の世となり、尊き國家社會となる、自我が強い處には有漏報土出で本然法性に順ふ處には無漏報土成立する。吾等の世界前者で諸佛の成就せられた所は後者である。自我を恣にして自然を往服し浪費したり天物を冒瀆し暴殄する人々の所には豊かなる國家を滅亡することは東西皆然りである。之に反して我が國の如きは岩山と海とで田地もなく産物も饒かでなかつたが、祖先以來克く勤め克く守りて、天物を培ひ育てたから偉大なる天祐を得るやうになつた。その自我個在を恣にして亡び行くものが有漏果報であり、無私奉公の赤誠により守り育つる無窮の國運は無漏報土である。君民一點の私心なく協心戮力、正を履み中を執り邁往息まされば古今を貫ぬき中外に通ずることができる。

三、阿彌陀の佛國

我が國民精神が淨化され高調される所に國運隆々として無窮性を強め來るやうに、無漏の淨心正行によりて金甌無缺の淨土が莊嚴される。これが諸佛の淨土であり千態萬樣各々微妙な精華が咲き立つやうである。これ等の衆美を鍾めて完うせるは阿彌陀の淨土である。その淨土は無量壽經によれば四十八願に成就せる所で、第一には勞働（獄道）と盲働（畜

生」と不働多欲（餓鬼）となき世界なりとする。即ちいや／＼働く者や分らずに働くもの、働かないで欲を恣にする者なく、皆正しき思想を以て歡喜し奉行するものばかりの世界である。それは彌陀の力の充滿し成就せるが爲である。阿彌陀の力は無量である。無量の力は離れて別に存するのではない、能く一切を成就して眞實の生命を完うせしめるもので、所として存せざるなく時として働かざるはない。これが無量見とも無量壽とも徒衆眷屬無量とも無量相とも無量幢とも名つけられる大徳である。無量光とは無邊に無礙に如何なる處をも明るくする御光である。煩惱妄念の闇も瞋恚忿怒の焰も等しく淨められ明るめられる、衆生の心想千萬無量なるに一々が淨化され明光されるを無量光と申すのであり、第十二の願でもあり、それが現に成就して一方を照らして念佛の衆生を攝取することは三經等しく説く所であり、最も容易に體驗する事實である。

月影のいたらぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ。と歌はれたる、光明は遍く十方の世界を照し念佛の衆生を攝取せられるので、愚痴の儘に南無阿彌陀佛すれば明るき彌陀の智慧光に照らされ、貧欲不淨の中に南無阿彌陀佛すれば淨き清淨光に澄淨される。何處にも照益し給ふ如く、何時でも増上し護念し生き往かせる限りなき御いのちであるから無量壽でもある。我等が努力するのではない、この御いのちによりて脚下に如來の一步を歩ませて頂くのである。

時は今、處あしともその事に打ちこむいのちとはの御命、我等の偏執分別を以てすれば親子も兄弟も相反くもので、情なき痛ましものながら等しく如來の慈光に照らされ、御命の攝理を蒙り、一人も漏らし給はぬ所が衆無量である。已に往生し今往生し當さに往生する差別はあれども、それは見る見ぬの違ひで、月は一切を照し如來は一方衆生往生の願を成就せられて居る。それらの相の大小美醜も、行ふ事の遲速も農工も簡ふ所はない、悉く照らし生かし給ふが阿彌陀に在します。この阿彌陀は一切を遍照し、十方に圓通し給ふが故に、今此に我等もこのすがた、此の事に頂くことができる。それは本願の極意只南無阿彌陀佛に在るが故に念佛の中に成就せられる。

稱ふれば吾も佛もなかりけり唯南無阿彌陀佛の聲はかりして

彌陀は一切處に一切衆を生かし成就し給ふ御力であり、その壽光満足せる世界が阿彌陀の佛國である。現在說法としては一切が覺醒され活躍させられ眞實生命に更生せしめられる姿であり、壽光無量としては何時でも何處でも攝化する御力であり、今此に明るく生きられる事實である。

四、淨土の現在

現在說法であり遍照月光であり壽相無邊であれば淨土の現在は明確なるに拘はらず、それが疑はれるは把握の道を過つからである。

具體的事實なりとて色相物質に固執するは淨土の淨を失ふものである。さりとて唯心性の清淨に凝滞するは淨土の土を見ざるものである。吾等の唯物唯心、定量差別の盲執が月を見ず淨土に遠かるので其距離正に十方三千世界十萬億土である。一たび目を觸るれば山も河も悉く彌陀の妙色身であり、鳥の音も水の音も等く說法の和雅音である。然し自然觀たり法性觀たる限り眞の淨土は宗うされぬ。又觀經などに説くよそ行きの氣持で精神を統一して觀る極樂の寶地寶池寶樓寶樹や彌陀の玉座、影像、眞身や眷屬たる觀音勢至諸往生人等を廣略にみる見方もある、がこれも余所事であり陪觀者にすぎぬ。眞の淨土は之を體驗し味讀するものでなければ接受親炙されない。親炙せぬから眞實に徹到することができない。これに親接するは吾れ見、吾れ聞き吾れ行ひ、吾れ生くる事實の中でなければならぬ。それは餘所行きの造り事ではなく、自然の素直な生活事實でなければならぬ。これ釋尊が凡夫日常の散心生活の中に極樂を味受せしめ往生を教示せられた次第である。然るにそれが大衆的社會善にせよ、小乘的獨修善にせよ、皆彌陀の本願でなく、又釋尊の説意でない、二尊の本意に従ふ善導の釋文では只一向專稱彌陀佛名に見出さるる淨土が眞の淨土である。



佛弟子中の一女性

—— 蓮華色比丘尼のこと ——

芝園輝一

1

印度地圖を擴げて見ると、あの三角形を逆さにぶらさげたやうな巨大なる半島國の北方、すこし西寄のところに小さく Hasan Abdal と云ふ活字が見出される。そこはあの莊嚴なるヒマラヤ雪峯がすぐ身近く迫つてそより、大河のインダスの源流が深い峡谷の中に勇ましい溪聲を發してゐる高原地の中の小さな町であるが、昔は得叉尸羅と呼ばれてかなり大きな町であつた——。この物語の發端はこゝにはじまる。

2

ヒマラヤおろしの風が、人々の頬にやゝ硬い、膚ざわりを覚えさせる或る初秋。得叉尸羅のある一軒の豪家に可愛い一粒種の女兒

が生れた。主人は既に年老ひてゐた。だからその愛撫は一通りでない筈のところ、殊更、女兒は非常に美しかつた。それで名は蓮華色と與へられた。ほんとに、老親の眼には、娘は輝く日光よりも、香はしい蓮花よりも勝れて美しく尊いものであつた。

手厚い愛撫と教養とのうちに、娘は若き芽の如く、美しくかつ健かに伸びて行つた。熱國の常として印度は早婚の風であつたから、はやく選ばれるべき花婿の名は秘そくと囁かれ、やがて蓮華色は夫を迎へて既に三年、その房室からは嬰兒の泣聲すら漏れるやうになつた。そしてあらゆる地上の願望の成就と満足とのうちに、老ひたる父は老樹の崩れるやうに、平穩に逝いて行つた。

老家主の死んだ跡は、どこの家でも何等かの新變化を経験するものである。こゝに新たな家主となつた蓮華色の夫の眉宇には自ら新しい緊張と得意とが溢れて來た。そして多忙になつて來た生活

につれ、外出勝の日は多く、妻の部屋にとどまる時間は、ずつと少なくなつて来た。然し、蓮華色はそれを悲しまなかつた。次第に展開し来る夫の社会的地位の向上を想像しつゝ、いそ／＼と部屋の中で愛らしい我が女兒の世話などしてゐて自分が何となく誇らしくかつ生き甲斐あるものゝやうに思はれた。かくて、またしばらくの平和な時が流れた。

それにしても、夫の夜遅い歸宅は、だん／＼と繁くなつて来た。眠られぬ獨居の夜に幾度か起き出で、後庭の噴水に碎ける月影を見入つて夜を更かした事であらう。

或る一夜の事である。夫はまだ歸つて来ず、眠られぬまゝ蓮華色は獨り起き出でて、夜陰の後庭の中を徨つた。家人はもうすつかり寢静まつたらしい。萬物寂として星ばかり降るが如く輝いてゐた。ふと樹間に漏るゝ燈火が見えた。それは既に寡婦となれる我母の室から漏れてゐた。

『ほだ起きていらつしやる』蓮華色は獨りごちながら、近づいて何氣なくそつと室内を覗いた。

覗きこむやいなや、蓮華色は思はずアツと云つたまゝ、激しく撃たれたる如く、我と我頭をおさへ、危うく倒れかゝる身をやつと傍の樹にさゝえた。

見たものは何であつた？

それは實に、豫想すら出来ぬほど恐ろしく、かつ醜いものであつ

た。即ち、わが夫とわが母との不義の現場であつた。蓮華色は一時に山の如き黒雲が蔽ひかぶさつて来るのを感じた。

自分を欺いてゐたのは自分の一生を任したその夫である。そして自分よりただ一人の夫を奪つた者は己れを産める我母であつた。親と子と二人の女性が、野獸のごとく一人の男に通じてゐる。これでも人間の生活であらうか。——蒼白になつた顔に齒を喰ひしづたまゝ蓮華色はよろめく如く、我部屋に歸つて来た。そこには、未だ二歳にしかならぬ、愛兒がすや／＼と快い寢息をたてゝゐる。ちつと熱い眼をその上に注いでゐたが、

『これがあの惡毒な野獸が自分を欺いて我身から産ませたものか。この顔、この濁惡』蓮華色は狂へる如く、我頭髮を掻きむしりながら、戸外に走り出た。

3

あてどの無い放浪が幾月か續いた。死を決したことも一再でなかつたであらう。野獸や蠻人に追はれた事も屢々であつたであらう。その放浪の永さと辛苦とは我々が次に彼女を見出す場所が、印度の中原を突切つて、すでに東岸の近く、ガンヂス河畔の波羅捺でありそこは得叉尸羅から數百里も隔つて居るを以ても察することが出来る。

しかし、蓮華色は波羅捺に來た時は既に一人の旅商人の妻となつ

てゐた。恐らく死ぬにも死ねず、生くるにも生きられず、この世を絶望し切つた彼女も、久しき放浪の辛勞の間に、優しくかけられた商人の情愛に、新らしく愛の蘇生を感じたのであらう。

はじめの内は、さまで富んでゐなかつたこの波羅捺の商人は、蓮華色を獲てから家運次第に擧つて來た。十年を経る内にはその近隣にて有名な隊商の主となつてゐた。隊商の常として毎年時季を定めて永い旅に出る。其年は得叉尸羅の方向に向つて行つた。得叉尸羅と云へば蓮華色の故郷である。自ら捨てた土地とは云へ、何となしに夫の舊す土産話が待たれた。

やがて夥しい貨物と共に夫の率ゆる隊商は歸つて來た。歸宅と共に俄かに忙がしくなる人の出入の間に夫の友人が訪ねて來て秘かに蓮華色に今度の旅に夫が得叉尸羅で一人の美しき妾を購ふて連れて來た事實を知らせた。聽いて蓮華色は「はつ」と思つたけれど、靜かに眼を伏せて「じつ」と考へてゐた。そして暫らくして立あがつて、夫の部屋に入つて行き、新しく連れて來た若い女と一緒に棲まわせてくれるやうに。二人の女して一人の男を嫉妬したり怨んだりするいさかいの心は自分には却つて堪へ難い由を語つた。夫は頭を掻いて、得叉尸羅で見たその娘があまりにも蓮華色に酷似てゐた爲に心が動いたわけを、くどくと言ひ譯した。

やがてその若い妾は蓮華色の前に連れられて來た。見ればまだ十歳ばかりの少女である。同じ得叉尸羅の生れと云ふことが殊のほ

か憐れを催さしめて、蓮華色は髪飾など取出して與へながら、故郷の事など何くれとなく尋ねはじめた。

問はるゝまゝに、恥しさに自分の身の上を語る、其少女の姿に蓮華色は一方ならず心を動かされた。十數年間と今とは全く變り果てた故郷の有様を聽いてゐる内に、いつか自分の眼は涙に滲んでゐた。

「それで、貴女の親御さんと云ふ方は」

少女は瞞毛を伏せたまゝ、靜かに答へた。

「お母さんは妾の二歳のとき家出をし……其後家業に失敗したお父さんは行方不明となり……跡に残つた祖母さんに育てられ……その祖母さんも死んで……人買の手に渡り……」

蓮華色は眼をしばだたきながら、更に問ふた。

「その時分の貴方の家は、あの町のどの邊にあつたの」

その答ふるを聞くや、何故か蓮華色の眉はさつと寄つた。そして吃るやうに、せきこみながら、つづけざまに問ふのであつた。

「貴女がお母さんに別れた時は二歳だつたのね——そして今幾歳？」

十四だつたわね。——すると今から十二年前ね——それでお母さんの名は何て——覚えてゐて？」

少女は覺えてゐた。

「蓮華色！」

電流に撃たれたる如く蓮華色の顔は硬直した。そして極き寄せる

やうに少女を抱き、その上に顔を押しつけたまゝ、膝を擧げて泣き出した。

『あゝ私の子だ。私の子だ。こんなに大きくなつて……』

聲も喉につかへてろくく出なかつた。ただ夢中になつて、この



十數年忘れた暇もなき愛兒の身體を抱きしめるばかりであつた。

そこへ扉の開く音がして、其家の主人が入つて來た。熱したる眼をあげて、ふと、夫の顔を見た時、忽ち蓮華色の頭の中に氷の如く冷めたく閃めくものがあつた。それは忘れんとしても、忘れ難き十數年前の記憶。昔は、我を産める親と一人の男を争ひ、今はまた自ら生める子と一人の男の愛を分つ。如何なる宿命か。この自分は、——忽ち我兒から手を離してあだかも呆心せるが如く立上つたが、忽ち、双手に頭髮を搔むしりながら、地に倒れた。

「わたしには、オ、悪鬼がついてゐるのか」

少女の顔もすっかり蒼白になつてゐた。そして床に倒れて身もだへしてゐる母の身體を抱きしめて泣きたい様におつと見つめてゐたが、やがて、唇を強く噛んで、急に隣室に駆け入つた。そしてやがて苦しい叫聲が聞へた。——娘は自らの宿命に恥ぢて自殺したのである。しかし、母である蓮華色には最早死ぬることも、生きることも、二つながら出来なくなつてしまつたのであつた。

4

其後、波羅捺より程遠からぬ王舍城に美しき中年の舞妓が現はれた。それは世を呪ひ、人を恨む蓮華色の成れの果であつた。彼の眼には、世に正なるものは一つもなかつた。直き道は人間には許されぬものであつた。在るものはたゞ汚眼の如き男性の感情と、執拗極

りなき宿命の黒手とであつた。すべてに絶望し切つた彼女は、今は自ら邪惡に身を投げて、惡魔の使徒となり、男の慾情を綾なしながら、この短き一生を塗り消さんとするのであつた。年は、もはや若いとは云へなかつたけれど、其體熱せる肢體と、奔放なる嬌態とは世の浮かれ男の魂を奪ふに充分であつた。かくて彼女の嬌名は王舍城の隅々までも擴がり、彼女を知らぬは遊子の恥となつた。

其頃、佛陀の教團は既にかの廣茫なる恒河の流域を東西に涉つて其大なる感化を興へつゝあつた。『教を傳ふるに一つ路を二人して行く勿れ。分れ道に來るたび、一人づゝ分れて行けよ。それだけ廣く残りなく人々に教を傳へる事が出来るから。』と云ふ佛陀の説示は、忠實に其弟子によつて守られた。かくて、かの颯爽たる秋風が、廣野に生ふる草の根の一つ／＼を残りなく揺る如く、佛陀の聖教は廣漠たる恒河の流域全部の民衆に滲徹した。

市民は争ふて城外なる耆闍崛山なる、佛陀の説法場に集り、時の移るを忘れて法悦にむせん。その端嚴なる姿勢を以て有名なる佛弟子等の行乞が、市中に現はるゝたび、人々は争つて、其捧ぐる鉢の中に米菜を投げこんだ。中にも佛陀の双腕と稱せられる二大上足、舍利弗、目連は人々の嘆仰の的であつた。誠に舍利弗の聰明と目連の俊敏は佛陀教團に於て日月の如く相對して輝いてゐた。

或日、一人の遊客が戯れに蓮華色に語つた。

『王舍城第一のお前の凄腕でも、流石に目連尊者には齒は立つまい』

然し蓮華色は冷笑して答へた。

『でも目連さんだつて男でせう』

そこで、奇妙な賭が兩者の間に成立した。そして十日の間に目連を誘惑しなければ、蓮華色は百、金を其客に支拂はねばならなかつた。

5

夕闇は既に地を蔽ふた。目連はやうやく一日の説法を終へて、今や王舍城壁を出でて、衆徒の泊れる耆闍崛山へと急いでゐた。突然道に當つて絹を裂く如き女の悲鳴が聴えた。馳けよつて見ると、數名の惡漢が一人の女性を捕へんとしてゐる。人の影を見て惡漢は逃去つたが、女は得起き上られぬ。どこか痛めたかと思つて肩を借すと女は縋々とそれにすがつて立ちあがた。肩に喰ひ入るやうな柔い肉感と胸を躍らす如き艶かな脂粉の香。しかし絶え絶えにかすかな聲で『どうも、ほんたうに有難う御座いました』と云ひながら、更に強く目連の肩にしがみついた。——女は云ふまでもなく變装せる蓮華色であつた。

然し、目連は默然として。片手で女を支へたまゝ、もと來た道は王舍城へと引返した。蓮華色は途上、或は再び暗の地上に倒れ、或は目連の首にすがり、さまざまに誘惑したけれど、すべて無効であつた。城内近く、既に人家も多くなつた所で、目連は蓮華色を離して靜かに口を開いた。

「女よ。肉體ばかりが總ては無い。肉の榮は短くして、うつり易い。されば、肉體のみに自己を、見出すものは憫み多く、悔い多いであらう」

肉體の自己のみを見る者は憫み多く、悔い多い……その言葉は白き閃光の如く蓮華色の頭上にはためいた。過去三十年の自分の憫み。それは、皆肉體に自分を見てゐたために起つた事ではなかつたか。やがて亡び行く肉體にのみ、この自分を執着した爲の憫みではなかつたか。卒然として、今迄腦中を鎖して解けなかつた黒雲の一方が裂けて、爽かな光がさして来るやうな氣がした。然し、氣がついて見ると、目連はもう其處に居なかつた。蓮華色は深い物思に沈みながら家路に向つた。

其御久しからずして、人々は王舍城の鬪妓、蓮華色が、憍曇彌比丘尼に従て出家した事實に愕かされた。入門以後の蓮華色は其行持の端嚴肅正なるに、先づ人々を驚かした。そして奇しくも、彼女が發心の師目連の特長にも似て其俊敏なる直觀力を以て僧團に其名を唱はるゝに至つた。其等に關して、この新比丘尼を遶る興味ある逸話の數々は佛教經論の各所に之を見出す事が出来るのであるが、然し今や殘さるゝ所の頁は少い。私は夫等の總てを略して、彼女が光輝溢るゝ如き終焉の場面を述ぶるに急がねばならぬ。

あの玲朗として一點曇りなき月に、之を蔽ふ村雲の存するが如く萬世の至聖、佛陀にも、提婆達多と云ふ敵手が存してゐた事は、解き難い人生の謎である。然し王子を誑き弑逆を行はしめてまで、我威を立てんと欲した提婆達多も、遂に王舍城から擯斥せらるゝの日が來た。彼はおさへ難き憤恨を佛陀の上に感じつゝ、市中を彷徨してゐた。

之に反して佛陀の名望はたたき擧るばかりである。今日も王宮に於て佛陀說法の大會が開かれた。國王、王妃は云はずもがな、百官、諸將より市民の主なる者に至るまで、悉く之に參列した。王宮城、最高樓には今日の聖會の印として、青白旗なびき、城門は眞一文字に開かれて、庶民の出入を自由にした。

時刻は既に至つた。參集の人々の影は悉く、王殿の中に收まつて、内には、既に佛陀の金音が振はれてゐるらしい寂として一種の莊嚴なる靜寂が、城内外を蔽ふた時、遅ればせに、城内に向つて急いで來る、一人の比丘尼の姿があつた。

それは既に佛弟子となれる、かの蓮華色であつた。今日は何故か事故があつて、佛陀の說法會の參集に遅れたのでやゝ急ぎ足に、しかし比丘尼の常規に従つて、眼を伏せたまま、城内に向つて坂を上つて來た。

突然、何處から現はれたか、巨大なる提婆達多の體軀がそこに現はれた。彼は特に今日の憤怨に堪へなかつた、街を行いて市民の影

少きを怪んで之を問へば、王城に佛陀の説法ある故だと云ふ。ついで先達、自分の擯斥せられた計りの王宮には、恨深き佛陀が来て説法してゐると云ふ、提婆達多の胸は焦るばかりであつた。それで思はず、禁を犯して、城内近く其姿を現はしたのであつた。

今し、説法の最中にて、人影見へぬ城内に近く、彼の眼に映じたるものは、黄褐の法衣を着して坂を上つて来る一比丘尼の姿であつた。狂暴なる提婆の感情は、この法衣の色を見ると共に忽ち爆發した。彼は近づき来る蓮華色の傍に駆け寄るや、あなやと云ふ間もなく、何事も知らぬ彼女の頭上を目がけて、巨いなる拳で亂撃を下した。か弱き彼女は面を蔽ふて地に倒れた。鮮血は泉の如く地に流れた。人々が之を知つて馳けつけた時には、提婆は既に何れにか逃走し、蓮華色は氣息も既にたえなくなつてゐた。城内から駆け出して来る多くの比丘尼等、殊に蓮華色を優しき法姉とも、法母とも慕ふてゐた、年少比丘尼等は法のたしなみも忘れて、彼女にとりすがつてよくと聲を擧げて泣きはじめた。

しばらくすると、蓮華色は眼を開いた。そして比丘尼等に半身を支へさせたまゝ、切れ／＼の氣息を續けて、次の言葉を述べたのである。

「優しい友達たちよ。悲しんではいけない。今、提婆によつて損はれたるものは、蓮華色の肉體に過ぎませぬ。それは影に過ぎませぬ。友達等よ、影に悲しんではいけませぬ。この肉體は私のものであつ

て、また私のものではありません。それは我れならぬ因縁のつなぐところ、憫みも苦しみも、みな我れならぬものゝ移行行きに過ぎませぬ。私の生涯の多くは、この我れならぬものゝ憫みに引かれて苦んで來ました。罪を重ねて來ました。しかし、それも今は總て善くなりしました。大いなる佛陀の光を見てからのちはさきに私を苦しめたものが却て、悉く輝きはじめました。丁度、あの月を蔽ふ雲が月光に照される時は、何よりも美しく輝いて、何にも勝れて月の榮光を現はすやうに、すべて惡しき事も、大いなる佛の光に溶ける時は反てより美しく輝く。優しい友達たちよ。どうぞ、佛道に努めて下さい。佛の光を見出すことは、眞の貴方を見出すと同じです」

かく語り畢つて、蓮華色の呼吸は絶えた。既に王宮の説法を了へて、こゝに來り、溫き眼をじつと蓮華色の顔に注ぎ、この輝かしき臨終の宣言を默然として、聴き入つてゐられた佛陀は、この時一歩踏み出でられ、大衆を顧みて告げられた。

「蓮華色は眞に佛道を歩んでた者である。蓮華が汚泥の中に生じつゝ、然も其華を開くや、純潔これに比ぶるものはない。佛道も亦憫みと闇とを貫いて輝く光である、彼女はまことに、人中の蓮華であつた」

まことに蓮華色の生涯は、かの汚泥の中より咲き出でた白蓮華にも比すべきものであつた。

隨 想

隨 喜 行

中 村 辨 康

四十二章經の中に

「譬へば一つの火があるとす。若し數百千人の人があつてそれぞれその火を移し取つて、或は燈びとし、或は物を煮て、色々に其益を分け取ることが出来るやうに、人の善をなすを見て隨喜することは福德甚大である」と云つて居る。

人の作善を睹て喜び得るものは幸福である。

そしてそれは最も大なる人格の所有者でなくてはなし得ぬことである。

藝術品を見て其崇高なる美に、思はず感歎の聲を放ち得るものは、少くとも其作者の心境と同一若しくはそれに近い心境になれた

からである。

それと同様に善事を見て隨喜し得るは、其作善者の心境と相應するものがあるからである。

否なそれよりも、もつと深い心がなければ隨喜の心は出て來る筈がない。

なぜと云ふに、人間には嫉みとか妬みとか云ふ心があるから、中々他人の善事を喜び得ないものだからである。

喜ぶよりも先づ妬む。

イヤな氣持ちだ。

だが、かゝるイヤな氣持ちもなく、心から本當に人の善事を喜び、人の善事の増上を祈る心は、人間として最上のものであり清淨なるものである。

善事は必ずしも全人的自覺を要しない。

然し、隨喜心は全人的自覺から來るものであり、自他一代の緣起の理を如實に徹底的に體得して居るものでなくては起り得るものではない。

昔前生に於て目蓮と舍利弗とが、王様の命に依て壁畫をかけた。其場所は丁度向ひ合つて居た。

目蓮は工夫に工夫を重ねて壁畫を完成した。

然るに舍利弗は終始精魂を盡くして壁面を磨いて居た丈であつた。

定られた日は來た。

王様は御成りになつて其出來榮えを見られた。

目蓮のかいた畫は實に絢爛目を驚かすものがあつた。

王様はふりかへつて反對側の舍利弗の壁を見た。

驚くべし。

夢の如く幻しの如く薄靄の中に浮き上つて見ゆる一幅の畫！

それは鏡の如く磨ぎすまされた壁面へ向ひの繪が寫つたものであつた。

其崇美！ 其優美！



法然上人御詠

月影のいたらぬ里は

なけれども

眺むる人の心にぞすむ

……月かげの歌に就いて……

諸名士の御評釋

姉崎正治

「月かげ」の歌は法然上人の人格をよく現してゐます、然し何となく力なく感じます、道

元禪師の「汲もひき」と同じ様で、日蓮上人の「たちわたる」と相對して心のゆき方の違がよく見えると考ふ。

佐藤春夫

佛敎の天地に遍きを悟らん者は、秋夜まど

けき月かげをながめたらんが如く心清くたのしからん程に人みなとく仰げとおほせられたるみこころなるべしと拜誦す。

曾我の家五郎

拜呈、佛敎復興の聲盛んにして、未だその實績の見る可きもの少き時「淨土」誌の創刊大賀の至りと存じます。

法然上人の御詠、誠に平易簡明にして佛の

この一首よく念佛の眞意を傳へて彌陀の本願を讀へうたひたり。製作年代不詳なるも怖らく開宗以後のものなるべく「續千載集」に出づ。

衆生救済と念佛による極樂往生の道をよく示し賜ふ。今日の物質文明の泥沼に喘いでゐる人々にとつて歸る可き心の古里の妙なる音樂ともなるものと有難く存じて居ります。

名優中村鴈治郎氏追善興行を目演する日、大阪歌舞伎座にて

宇野圓空

月光界裡の法悦をお詠みになつた聖者の澄

淨安立の境地は、低下の凡愚には不可測です
だが煩惱障眼雖不見、大悲無倦常照我と覺
束なくも欣ばせてもらふのは、他力廻向の信
樂なればこそでせう。しかもそれが西方欲生
の本願力によつて、極重惡人の必然的自覺と
表裏するところに、佛教の金剛不壞信の極致
があると思ひます。

小笠原長生

信仰の精神を簡單明瞭に言説せられて餘蘊
なきものと存候。

上田萬年

前略

残念ながら病氣中につき執筆いたしかね
候。

辰野九紫

月影のいたらぬ里はなけれども
ながむるヒマのなきぞ悲しき

徳山 璉

まことにうがつた歌であると思ひます。
僕はこの眞理をいろ／＼なことにたとえて

考へて見ました。

「月影の」を「レコードの」といれ換へて「な
がむる人の」を「聞きいる人の」にしてみる
と又面白いと思ひます。僕のレコードをほん
とに聞いて下さる人には感謝せよと教えられ
ました。

白鳥省吾

所謂「歌人の和歌」でない素人くさきたど
たどしさも感ぜられますが、法然上人を生め
る時代背景とその人格を考へて、私もその信
者と共に頭を下げませう。

私の生れた東北地方は禪宗の盛んな處でし
たが私の町には念佛の信者數軒あり、ひそか
に信じたるを以て「隠し念佛」と稱したり。
白鳥家の本分家三家の墓地はその故を以て寺
院に葬らず、風光絶佳の小丘にありたるに今
は小學校となれる因縁あり、小生も間接には
法然の信者ならんか。

相馬御風

いたづらに文句をならべるよりも此歌をさ
ながら口誦してゐた方が却て大きな功德に預
ることが出来るとおもふ。浅はかなはからひ
を加へぬがよからう。

松浦 一

法然上人の月影の御歌は實に有難い御作と
拜されます。光明徧照十方世界念佛衆生攝取
不捨の聖句が誦するに従つて玉の如き響を立
て、佛縁と淨土とを眼前に現出する力を持つ
て居りますやうに、上人のこの御歌は上人の
御姿と御聲とをも現し來り、これを誦するに
従つて淨土は脚下に建立されます。念佛の力
は人間の俗智では分りません、上人のこの御
歌の力も俗情では解けません。佛と人、宗教
と文學の間には俗智俗情は入り難く、その入
り難い處に於て凡ては淨土に歸して行きま
す。さうしてこの御歌は淨土の夜明けを示し
て下さる曉の鐘の音です。

「元祖」の意味

高 瀬 承 嚴

大師は弘法にとられ、祖師は日蓮にとられたと



増上 寺の 百日結集道場

— 佛教と社會

事業の結合 —

東京府救護委員會が知識階級の失業青年を救済する目的の一部として、増上寺に委託して昨年の十二月廿二日から「増上寺百日結集道場」を芝公園の佛心院に開始した。増上寺社會課長野村在定氏を首座とし、淨土宗社會課の島野貞祥氏、及び花田半助氏が指導員となつて、全國から選ばれた廿歳から廿一歳のインテリ失業青年廿一名の訓練に當つてゐる。これは佛教と社會事業との新しい結び付きとして興味あるものである。

の諺につれて、今一つ元祖は法然にとられたとの言葉が傳へられてゐる、その法然にとられた元祖とは一體何でせうか。

七十餘歳の高齡で、弟子の罪に座して波瀾を越えて讃岐へ流罪に處せられ、別れを惜しみ、高齡の師を思ふ切なる心から、師に對して念佛の弘通を一時休止してはとお勧め申上たに對し、念佛を一人でも多くの人に稱へるよう勧めめることは自分にも與へられた天職であり使命である、都を中心としての勸化は一通り出来たようだ、遠方へも勸化に赴きたいと思つてゐる間にかく老境に進んでしまつて、いつ行けるとも測り知ることが出来ず残念に思つてゐたところへ、この度の流罪の御宣示である。何と云ふありがたく、得がたい機會であらう。この機會を逸しては重ねてこの好運は來るまいと、喜び勇むで津々浦々に念佛の法門を説きながら、邊境の地に赴かれ、又入寂に臨み、弟子達から傳教は叡山に、弘法は高野山と云ふやうに、これまでの祖師先德は何れもそれぞれ遺法宣布の中心道場とすべき遺跡がある。然るに師匠にはこれと云ふ定まつたところがない、我々は何處

を以て遺跡とし、遺弟集合の中心道場とすべきやと尋ねた時、跡をここぞと定めたならば、折角自分が説き勧めた念佛の法門はそこに固定して普遍的なものとはならない、自分が叡山を下りて萬衆に念佛門を勧めたのは、局限された人々だけに佛の御教を説くのでなく一切の人々をしてともく朗らかな氣持で佛の御教を聞き、信じ、行はしめたいためであつた。従つて我れ今、八十を一期として淨土に往生するにあたり、古來の祖師先德のなされたに反し、ここを遺跡と定めると云ふことをしないのは、自分が今日まで教へ勧めて來た念佛の法門を更に／＼普遍的ならしめたいためである。我が往生後、若し一聲でも念佛の聲が聞ゆるところあるならば、たとへそれがどのようなところであらうと、それは即ち自分の遺跡であると思ふが良いと答へられた。

この二條の物語は何と我々をして力強い思を懷かしむることであらう。本當の萬衆の心のなやみを救はねば止まぬ、それがためにはどんな苦難も厭ふところでない、與へられた苦難は即ち天與の好運であるとのありがたい心持を知つては、すぐ

變坊の記者が無理をして訪れたのは午前七時過ぎであつたが、門を入ると本堂の方で朝のお勤めが始まつてゐる様子だ。皆若くて元氣の良い聲である。失禮してのぞいて見ると、廿二三の潑潑たる青年達が廿人程できちんとしてた態度で静座禮拜をしてゐる。三歸文、四弘



誓願、總回向文、三唱禮、朗誦と順序正しく静座禮拜してゐる。副指導員の花田先生が快く記者を迎えて應接間へ通る。古色蒼然たる古寺だが、何處もかしこもきちんと片付いてゐて、見るからに心持が良い。

と飛びつきたい、だきつきたい、思ふ存分自分の顔をその人の膝につけて泣きたいとの感が湧いてくる。このような人こそ、本當に我々の信仰を活かし、下さる人であり、救つて下さる人である。

佛教が印度に起り、支那を経て我が國に傳へられて今日に至るまで、佛教界の偉人、高德、祖師と云はれる人は到底數へきれぬほど出られた。けれども、それらの中でほんとうに嬰兒が飛ひつく母の乳房のやうに、我々が忘れることの出来ないなつかしみと嬉しさを有する祖師と仰がれ、高德と讃へられる人は、法然上人を措いては到底他に求むることが出来ぬ。

念佛を稱へたならば淨土に往生出來るとの教は既に／＼多くの人々に依りて説かれてゐる。然るに法然上人を以て諺にも元祖は法然にとられる

などと、どうして念佛門の元祖を法然上人と讃へるに至つたか。それはあまりにも簡明な問題である。從來の人々は念佛を稱へることによりて往生する淨土を論ずるに、阿彌陀佛が修行位中に立てられた誓願の深旨を曲解してあまりに理論化したに反し、唐の善導大師は、阿彌陀佛の本願の深旨を徹底的に解し、これこそほんとうに我々末世に生を受けた者の救はるべき御教であると信じ。ひたむきに念佛の法門を高唱した。上人の念佛宣布は從來の先德所説の佛教と趣を異にし、萬象悉く導かれ救はるべき御教であると、大河の決する勢で津々浦々までも弘まつて行つた。これが上人を指して念佛の元祖と仰がるに至つた所以である、若し上人の出世がなかつたならば、念佛の法門はどうなつたことであらう。

上人傳に關して

佐藤春夫

法然上人の傳記を小説にして讀者諸君のために

提供したいから筆を執れとの依頼を受けたが既に

『仲々成績が良いので私達も張合があります』と花田さんが仰有る。『御覽の通りで、訓練生が部屋々々は勿論、庭の掃除まできちんとやつて呉れるので、何時も綺麗になつてゐます。』

こゝでの生活は宗教精神の涵養規律ある生活、勤勞の習慣、實務習得と云ふことを主眼としてゐる。選ばれた廿一人の訓練生は毎朝六時半の起床から掃除、靜座禮拜、國旗掲揚式、體操を指導員の指揮に従つて活潑に行つてから朝食を食ふのだから、寢起きの悪い記者の朝めしなぞとは餘程味が違ふだらうとすらやましくなつた。

『かう云ふ秩序立つた生活は仕事の能率の上にも非常に良く、何處の職場でも評判が良いです。』この訓練生は遞信局や京橋、麻布等郵便局に雇はれてゐる。また健康の

先約があるので二篇も書くことは出来ない」と御辭退したが編輯者は更にそれでは勅修御傳を現代の一般讀者を目やすにした文體で書き通さないかとの相談である。ところがこれはもう中里介山氏が法然行傳で試みて成功してゐるから自分がおくればせに手をつけるのは屋上屋を架するといふか蛇に足を添へると申すか、まるで無駄な仕事になる。しかし、どうしても上人の傳記を僕に書かせるといふ案を編輯同人は捨てないらしいので、いろいろ考へてみた末、僕は聖覺の記した上人傳を書き直してみようかといふ氣になつた。これは所謂十六門記と稱せられてゐるもので上人の傳記のなかでは最も古いもので、上人の入寂後十五年を経た安貞元年極月に上人の御弟子のひとりによつて記されたものだから嚴密を史實としては、多少疑はしい節がないでもないとは聞くが、それでも大たいとして信ずるに足るものと思へるところへ、記述者聖覺法印は上人の門下でも說法第一と稱せられた上に、上人も登山狀を口述してこの人に筆を執らせてゐる事實から見ても門下でも文才の傑出してゐた人と思へる。十六門記は事實要領のい

い傳記で師に對する敬慕と信仰の深さとがよく現れてゐる點で立派な文學になつてゐる。その蒼古とも稱すべき文字は立派なものであるが惜しい事に現代の一般の人々には少々讀みづらいかも知れない。折角の名文を書き直して粗末なものにしてしまふのは心ぐるしいが判らせるためには致し方ないといふ申しつけも立つ上に、これならばさう長くないから、毎月少しづつ骨に折つてゐても讀者をさう飽かせないうちに完結するだらうし間違ひなく自分の勉強にもなる。もし十六門記そのものに何かの缺點があつていけないのでない限り、自分としてはこれを書き直して讀者のお目にかけたいものである。

執筆者紹介

● 椎尾辨匡氏。文學博士、大正大學教授、早大及び日大講師。「共生會」師表。我國佛教學界の權威。
● 中村辨康氏。淨土宗教學部長。「信仰讀本」其他の著述あり。
● 松浦一氏。大正大學教授。「文學の本質」を始め數多の文學論は餘りにも有名である。

點からも非常に良好でこゝに來てから一貫以上も肥えたと言ふものもあるから恐ろしい。職場への行き歸りは徒歩である。夕食後は淨土宗教學部長の中村辨康師や藤井實應師の修養講話、逓信省、内務省の實際家の實務上の講話、珠算、習字書簡文、禮儀作法等の實習がある。説く方も聞く方も心を籠めてゐるためか、成績はどん／＼上つて行く。自由時間には自主的に本堂へ集つて讀經する程になつてゐるそうだ。

『逓信省や内務省から再三視察に來られました、成績が良いので皆満足して歸られます。』と花田さんも満足氣であつた。

北海道廳や各府縣からも視察員が來て、是非自分の方でやり度いからと詳しい報告を持つて歸るのが多いそうである。



茶房娘 ユリコ

北 林 透 馬

少女を求む 近代的な明朗な方

と書いた小さな紙片のぶらさがつてゐる。喫茶店エトワールの扉の前に立つて、もぢもぢしてゐる一人の少女。

思ひ切つたやうに、扉を、そつと押して

「ごめん下さい。」

と聲を掛けた。

「誰方？」

現金出納器の向ふ側で、何かやつてゐたマダム

らしい若い女が、振りむいた。

「あの……」

「御用？」

と言つたが、扉の陰から顔をのぞかしてゐる少女の姿を見ると、直ぐに解つたらしく

「あゝ。お遣入んなさいな。好いのよ。誰あれもお客さん、いらつしやらないから。」

「えゝ。」

と答へたが、まだもぢ／＼してゐる様子なので（ウブな子らしいな。）

と思ひ乍ら、マダムは氣輕にとび出して來て

「好いのよ。お遣入んなさいつてば。」

少女の手を取つて、室内へ引き入れた。

「は。あの。すみません……」

少女は、もう眞赤になつて、羞しさに頭を下



文明開花 物語

吹き出すべからず、今に我々も笑はれるのですぞ

法螺貝が電信を止める

今ではどうか知りませんが、縣廳の（神奈川）の向ふの二區の前に電信局がありました。恰度明治二年の五月頃、高島町のところに未だ娼妓屋が出来ない時分、あすこで撃劍の芝居の見世物のやうなものが本戸をとつてやつてゐました。その頃のことですから、貝を吹いて勝負の時には大騒ぎでした。ところが東京から電信が来る恰度その線の下

げたが

「あたくし、あの……」

と言ひかけるのを

「解つてゐるわ。外部の廣告を見て、いらしつたんでせう？ 少女募集の廣告を見て。」

とマダムが言ふと

「ええ。」

と少女は、言ひ出し難い事を云つて貰つて、ほつとしたやうにマダムを見た。

「さう。」

言ひ乍らマダムは、改めてまたまじく少女の様子を見やつたが

（服装も悪くないし、器量も相當だし、第一とても品が好いし……）

これは素敵な「堀出しもの」だと思つた。

「如何でせうか？ あたしぢや不可ませんでせうか？」

マダムが黙つて顔を見だるるので、少女は心配さうに問ひ返した。

「いゝえ！ 結構よ！ 素敵だわ！ あんたみたいな綺麗な方に來て頂ければ、どんなに好いか知れやア

しない。」

マダムは、ひどく乗氣になつて

「此方からお願ひして、是非來て頂きたいと思ふくらひだわ。」

少女は、やつと安心したやうに、微笑を見せて

「本當ですか？……でも、あたくし。」

「今日からでも、直ぐに働いて頂きたいわ。で、

あの、今、何處にお家があるの？」

「家ツて、あたくし……」

少女は、また急に不安な顔になつて

「あの、此處の家へ、何處でも好ございますけど、置いて頂けないでせうかと」

「棲み込み？」

とマダムは訊き返し乍ら

（このくらひの子だもの。何か事情が在るにきまつてゐるわ。……で無きやアこんな好いお嬢さんが

急にこんな店へとび込んで來るわけはないもの。）

にツこり笑つて

「ええ、何うせ此店は、あたしが一人でやつてゐ

るんですもの、婆やが一人ゐるきりなのよ。あなたなら、あたし、妹だと思つて可愛がつて上げ

で華劍芝居をやつてゐましたが、電信がかゝつてゐる時に、貝を吹くと電信が聞えなくなつてしまふ。どういふわけで電信が聞えなくなるか最初はどうしても解らなかつたが、だん／＼調べたところが漸くそれが解つたので、芝居が始まつて二日目か三日目かに貝を吹くのを止めてしまひました。スルト、それから東京から來る電信がずん／＼解るやうになつたと云ふことです。（赤松正則氏）

釣し賣りの新聞

新聞の出來始めには配達なんて云ふものは無かつた。今の交番見たいな小屋が立つてゐて、そこに新聞をたばにして紐で釣して置くと思ひに來た大概の人は子供に五厘持たして（新聞は一枚五厘だつた）やつて、その新聞を一枚はがして買はして來る

ることよ。」

「まあ……」

御親切に有難うございます……と、少女は子供のやうに嬉しうな眼で、マダムを見上げた。

かうして、ユリコはエトワールで働く事になつたんだが——

「マダム、こんだの子は素晴らしいね。」

「まつたくだ。こんな、ちッぽけな喫茶店にやア惜しいぜ。」

なんぞと、お客のほうの評判も大變で、たちまちユリコは、附近での人気者になつてしまつた。

「この子はあたしの、遠い親類の娘なのよ。こんな喫茶店なんかで働くやうな子ぢやアない、ちやんとしたお嬢さんなのよ。」

とマダムもユリコを、妹かなんそのやうに大事にしてゐた。

「ふうん、マダムの親類かい。それで僕ア安心したよ。」

「安心した？ 何故？」

「若しかして、東郷侯爵か御令嬢かなんかぢやア無いか、と思つてね。」

「ほゝ。まさか。」

「若し侯爵の令嬢だつたら、大いに仲好くしやうと思つてたんだが、残念だなあ。」

「あんたみたいな不良學生、侯爵の令嬢が相手になんかして呉れるもんですか。己惚れぢやア駄目よ。あんたの戀人には、下宿屋の女中ぐらひが身分相應よ。」

「ひどいこと云ふなよ、オバさん、……けどね、僕ア何も侯爵令嬢の戀人にして貰はうなんて、そんな大それた望みは無いのさ。うツかり誘惑したのなんのツて、こわいオヂさんに脅かされたりしぢやア合はないからね。僕ア只、令嬢と知合ひになつたら、好い就職口の世話でもして貰へるかと思つてね。」

「まあ呆れたひとねえ。」

近頃の學生なんてものは、なんてコスいことばかり考へてるのか。なんてケチ臭いソロバン勘定をするんだらう！……とマダムは少々びつくりしたほどだが

「若しかして東郷侯爵の令嬢かと思つてねえ」と言つた言葉だけは、妙にビーンと頭に響いて

と云ふやうな鹽梅だつた。配達を始めたのは繪入新聞が始めだつたと思ふ。(梅翁)

大人が乗つては

飛ばぬ飛行機

昨日曜の午後、本郷第一高等學校の運動會で某博士が飛行機の實驗を行つたさうだ。實見しないのだから詳しくはいへぬが、新聞の報道に依ると、十歳以下の子供が乗ると少しばかりは地上を離れたさうだが、大人だと一寸も地を離れず、とく／＼中止したさうだ。イヤハヤ新式の飛行機でもあるかの如く、大人が乗つて地びたを離れぬなどば、専門家の實驗としては、恥かしい事ではあるまいかと、飛行好きだけに一言して置く。(明治四十二年十二月六月思案外史)

みた。

(ほんとに、若しかしたらあの子、何處か御華族さまのお嬢様でも有るかも知れないわね……)

が、マダムがそれに考へつく以前に、エトワールのお客の間では、既に

「あのユリちゃんてのは、君、華族の娘だッて話だぜ。」

東郷侯爵の令嬢がフラ

／＼と家をとび出して、

浅草の喫茶店のティ・ガ

ールをしてゐた、と云ふ

のは、まだ耳新しいニユ

ースだツたもの。

何と無く譯の有りさう

なユリコの様子。上品な

態度。

若しもユリコが、名

門の令嬢でもあツた

ら……?

(あたしはあの子を救け

てやツたんだもの。うん

とお禮も貰へるだらうし、

第一新聞に書いて貰へるだけでも大變な宣傳だ

わ!)
マダムは、急に胸がドキ／＼して來た。



と云ふやうな噂が、
さもまことしやかに傳
へられてゐたのだ。

その晩マダムは

「ねえユリちゃん、あ

たし、あんたを、本當

の妹だと思つてゐる

んだから何もかもあた

しに打明けて、本當の

話をして頂戴ね。」

と前置きして

「一體あんたの、本當

の名前は、何て云ふ

の? あんたのお父さ

ま、何をしていらツしやる方?

と、身上話を訊かうとすると、ユリコは

「いゝえ。いゝえ。それだけは訊かないで下さい。」

銀座のオムニバス

明治七年頃でしたが、「煉瓦」の通
り(今の銀座通りを云ふ)オムニバ
スと云ふものが通りました。これは
二階馬車のことですが、當時は原語
そのまゝにオムニバスと呼んだので
す。このオムニバスは紀州の由良と
云ふ、後に陛下の駁者になつた人と
伊東八兵衛と云ふ二人が始めたもの
で、雷門に千里軒と云ふのがあつ
て此處が雷は、車庫で、雷門と芝
口と間を往復して居たのです。此の
車庫は英國のものを輸入してそのま
ゝ使用したので即ち舶來品でした。
ですから数はたつた二臺しかありま
せんでした。馬は四頭立て車庫は黒
塗り、二階は春中合せに腰掛けるや
うになつてゐて梯子は後部の車庫の
居る所に附いて居ました。駁者はピ
ーロードの服にナポレオン帽を戴い

「……お願ひです。」

わツと聲をあげて、子供のやうに泣き出してしまつた。

その様子を見やり乍ら

(やツぱりさうだツたのか……)

とマダムは、色々と欺し／＼ユリコの身の上を問ひつめると、名前は言へないけれど、父は立派な實業家で、家は麻布にあり、自分はたゞ變つた事がしてみたいから、ふらふらと家を出て來たと云ふ。

すべて、マダムの想像通りだつた。

其處でマダムが

「そりやおお嬢さま、不可んわ。お邸では何んなに御心配遊ばしてゐるか解りませんもの。一度、お歸りにならなければ。」

「嫌アよ。あたし。何時までも此處に居たいわ。」

此處の方が、どんなに好いか知れないんですもの。」

「そんな駄々を、おこねになるもんぢやア御座いませんわ。」

色々に説いて、やツと一度家へ歸る事だけを承

知した。

それから二日ほど經つて、マダムは、ユリコの爲に新しく作つてやツた素晴らしいお召を着せ、色々とお土産を持たせ、「何かに要ると不可いから」と六十圓ほどの現金まで持たして、ユリコを家へ歸らせた。

「ぢやア氣を附けてお歸り遊ばせね。二三日中に、あたくし、お邸の御氣嫌うかゞひに上りますからね。」

と、マダムは上氣嫌だツた——

が、それツきリユリコはエトワールへ歸つて來ず、マダムが訪ねた麻布のお邸には、そんな令嬢は居ないとの事だツた。

「畜生！欺されたんだわ！」

マダムは齒がみをして口惜しがツたが、何時の間は何うして借りたか、エトワールの御定連、五圓、十圓、二十圓と、一人残らずユリコの爲に金を借りられてゐた。

……とは又、淺間しい話ですな。

て居ると云ふ始末で兎に角珍らしくもあり、また立派なものでした。乗

車賃は下が高く二階は安うございしました。多分下の方の乗車賃は芝口から淺草まで一分だつたかと思ひます。所がなにしろその時分の狭い往來をこんな大きな而も四頭立の馬車が走つたものですから度々方々で人を轢いたりして怪我をさせたので大分評判が悪く、随つて乗るものも危ながつてだん／＼に乗客が減つたので、とう／＼ほんの僅かの間で止めてしまひました。(淡島寒月氏) 銀座に馬車が交つたのはこのオムニバスが始めて鐵道馬車はそれからずつと後の明治十三年である。

馬に擬す老僕(ちやうど)の背や菖蒲(きよふ)大刀

五城樓

雲かとよ夢の穗見えて紙織

文 麟

念佛の家

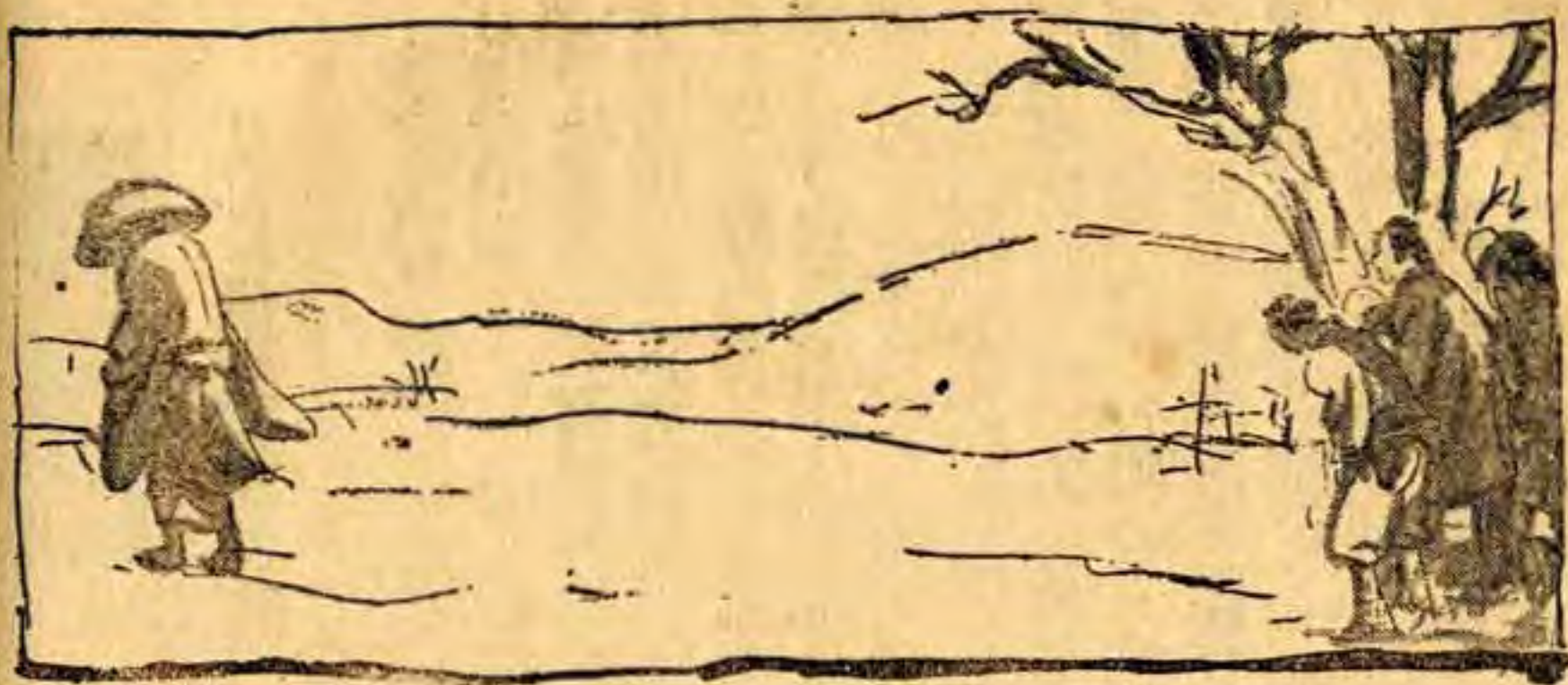
奈良佛教修道院

修道院の名稱を佛教徒の手に移して、著々修道の實を擧げてゐる一團が奈良大佛の西北の高燥閑寂な地に道場を營んでゐる。昭和四年七月に小早川蓮秀上人によつて創立された佛教修道院がそれだ。原始佛教教團の「和合」「無諍」「共同」の精神を體して、同志の修養と勞働によつて念佛即生活のゆるぎない光明の道を歩みつけてゐる。院の日課としては、午前四時晨朝勤行。聖典讀誦、念佛、回向、朝食歌頌、八時から農園に出る者、販賣部生産品に従事する者、勉強する者等勞働を始める。十一時、日中齊供養、十一時半晝食。午後一時から五時迄再び聖勞に従事。夕食後六時には昏暮の勤行。法話、明日の働きの割當があり

終課をすませて九時就床。また一日、八日十五日、二十五日は齋日布薩會を修して朝暮に犯す罪を懺悔し、戒香の清淨ならんことを念ずる。尙、修道院に於ける修道者の經常費は絶對に寄附によらず、與へられた何らかの勤勞によつて自活することを鐵則としてゐる。經常費の主なものゝ販賣部、(念珠、線香、藥品、木魚、バイ、寫眞撮影、園藝花卉、藥草等の製作)の純益。傳道講演、佛畫等の納金を以て充てられてゐる。修道院の意義目的に就いては、左に院内一修道士の書信の一節を掲げて親しく修道の呼吸に接しやう。(大阪・長谷雄普隆師の好意による)

「……佛教界に專念修行に身を委ねて心ひそかに靈を培ふ適當の道場なきことを遺憾として、昭和四年七月奈良市郊外に六千餘坪の地をトし、自活自營による修道院を設立する事になつた。釋尊の原始教團、さてはキリスト教の修道院も一通り考慮に入れ

て、原始教團に實踐された諸々の戒律、聖ベネチクトの戒律、大乘戒等を取入れ先づ「修道の鑑」なる規範を編み、それを依據として最初八人の女子と男子三名とで修道院の生活を試みたのであつたが、何らの經濟的支援もある譯でなく、忽ち行詰つてしまひ、約四ヶ年と云ふものは全く飲まず食はずの生活が続いた。念佛中ふと木魚の製造を思ひつき、幸ひ大工の出来る同志が交つてゐたので京都へ行つて實際を見、二ヶ月目には出来るやうになつた。そこで販賣部なるものを設け有縁の人達に買つて貰ふ様になり、どうにか融通がつくやうになつて來た。現在には十餘名の者が農園や販賣部の製品を作り生活自立をしうるに至つた。今後人員の増加と共に更に農園を擴張し野菜果樹を作り、大いに努力しようと思つてゐる。修道者の中には生涯を修道に捧げて行く者、又短期間修道した後家庭に入る人もある。」



趣味
講座

子育て吞龍

大谷 梅庵

弘治年間豊臣氏末葉の頃、武州岩槻の城主太田美濃守資正の家來に井上將監信貞といふ天晴な武士がありました。奥方を眞弓と申し、何不自由なく日々暮して居りましたが、お子さんがない、御夫婦は常にそのみ心配して、或る日のこと眞弓は良人に向ひ「昔から神佛に祈つて子供を擧げたと云ふ話を能く聞いて居りますが、妾もせめて一人欲しいと思ひます。如何で御座いませう」そこで將監は「あゝ、好い處へ氣が付いた、昔から神佛の申兒といふものは能くあること。お願をして見るがよからう。」

良人の許しを受けた、眞弓は、其の日から一の曲村の圓福寺といふお寺の境内にある龍神の祠へ日參を始めました。現在東武線淺草驛から太田へ行く途中、武里から左へ數町、停車場には吞龍上人誕生の地といふ建札がたつてゐる。眞弓は一日も參詣を缺さず、三七廿一日の満願の當夜、寢所で頻りに腹されて居るので、將監が「コレ奥如何いたした。」揺り起されて奥方が驚いて目を覺して見ると、身體中水を浴びたやうな汗。「大分臆されて居つたが。」「ハイ只今澤山の龍が私を取巻き逃げる事ができないで身をもがいて苦しんで居る所の夢を見ました。」

その時、「變つた夢を見るものだな」と言つたが、夫れから奥方が懷妊、夢に龍を見たといふのは、龍神様の御利益に依つて、子供を授かつたに、ひないと、御夫婦の喜びは一方

では御座いませぬ。十月十日の月満ちて、弘治二年四月廿五日午の刻、生み落したのが玉のやうな男の子、夫婦は天にも昇るやうな喜び、當る七夜に龍神様の授け子として龍壽丸と命名、掌中の玉と慈しむ育て、居つたが、『這へば立て、立てば歩めの親心』龍壽丸は幸ひ蟲氣もなく成育し誠に惻發、七八歳の頃、土を丸めて佛像のやうな物を拵へたり、名號を唱へたり、總べてが坊さんの爲草、將監は折角自分の後繼者が出来たと喜んだ甲斐もなく、佛に縁ある行ひ、これでは連も武士の家の跡目にはなれまいと、龍壽丸が十三歳の春將監は龍壽を手もとに呼んで、『龍壽其方は大きくなつて何になる積りぢや。』「私は坊さんになつて此の世の人々の難儀を救ひたる御座います。」と十三歳の子供に似氣ない立派な答に、父將監も舌を捲いて驚かれた。そこで其年武州岩槻の白龍山林西寺の炭辨和尚に頼んでお弟子と致し、名を吞龍と改め一心不亂に修行を積み、十五歳の時師匠炭辨の勤めによつて、江戸三縁山増上寺の觀智國師の許に修行の爲め登山を致したが、聰明な吞龍は實に一を聞いて十を覺ると云ふ惻發さでした。師を驚かす事一再ならず、十八歳の時既に上人と呼ばれる迄の修行を積み、念譽上人となつて林西寺へ歸山、炭辨和尚も觀智國師の書面を見て非常な喜びであつたが、吞龍は平々凡々と寺に居る様な人ではない、再び師の坊の許を得て諸國行脚の旅へ立ち出でました。

さて上人は上州路を峠越に信州路へ入り更に越後路を目ざして行

く途中折しも冬の夕まぐれ、信州の追分へ出ようといふ手前で、大雪に會ひ雨具の用意とでもなし、行き暮れて『この雪は困つたものだ』と思ひながら、雪明りに透して見れば小さな阿彌陀堂『あゝ是れは有難し、今宵は此のお堂に一夜の宿りをお願ひ申さう。』寒さと飢を耐へて中に入り本尊に向ひ夕の勤行を致し横になり、そのうち晝の疲れで眠氣を催して参りました。スルと草木も眠る正満頃家鳴震動、驚いて目を覺すと目の前へ朦朧と現れた男の姿、此の亡靈を濟度して翌朝出立、路を越後路にとり、行脚の旅を續きました。

越後國南蒲原郡羽生田村喜作の家では父親の三回忌法要の爲親族及村人達が集り、お念佛修業中村人の一人が上人を伴ひ來りて一遍の回向を願ひ、主人が三年前父親が伊勢參宮より江戸見物に出たきり便りもなし出た日を命日として回向をする事を聞きしが、去る時信州路の阿彌陀堂での亡靈の告げにより所持し來りし物品を示せば正しく父親の所持品と分り初て父は非業の最後を遂げた事を知りましたが上人の濟度を受けて成佛した事を喜び暫らくの御滞在を願ひました。暫らく此の喜作の家に世話になつて居りましたが、此の村に子育地藏尊一體を刻みさゝやかな庵を造り其處に安置して、上人は一七日の別時念佛を此の庵にて修行し、『サア此の地蔵には袈裟の一心が隨つて居る、子供の事は何んでもお願ひをなさい』といつて此の村を出立しました。八年間の修行を終り、林西寺へ歸山されると炭辨上人は下野の西岸寺へ隱居いたし、吞龍上人林西寺を董しまし

た、其の後方太田の金山へ徳川家の先祖新田氏の爲に一寺が建立され、之れを義重山大光院新田寺と稱し何人を以て開山とするかと云

くなつてしまひます。無くなつても大事な、困つた者に施して喜ぶ聲を聞いただけでも心地が好い、早くあるだけ施してやりなさい。そこで三百石の米を残らず施

ふ議が出た時に、觀智國師の推薦に依り吞龍上人が選ばれて大光院の開山と成りました所が、其の頃は徳川家の最初ですから世の中が未だ血腥く、上州邊には野武士が横行して金のありそ

うな家へは隊を組んで押入り、金や米を掠奪して行く反抗をすれば斬り棄てるといふのですから、百姓町人の難儀は一通りではない、今は食ふ事さへ出来ぬといふ慘狀さ、之を上人がお聞きになつて氣の毒な事だ助けられるだけの人は助けてやらうと、大光院には三百石の御朱印が付いて居りますから、お弟子の吞仁に申しつけて、食ふ事も出来ず困つてゐる人が澤山あるといふことぢや、寺にある米を施してやりなさい、どの位分けて遣はしませう、どの位と聞くことはない、三百石残らず施してしまひなさい、それではお上人様初め私共の食べるお米がな



いてゐる米を濫用したには違ひないから、流石の上人も是れには一

五月の大事件



廿七日 (明治廿八年) 日本海軍
「大海戦、大海戦、大海戦、大海戦、今
は唯これだけを云つて置く。」(廿九日報
知新聞)
この號外は國民興奮の有様が手に取る様
に見えて面白い。翌日「敵艦見ゆ」との警報
に接し云々」と云ふ有名な「東郷司令長
官の報告が掲載されたが、それと一緒に
一聯合艦隊は本日沖の島附近に於て
敵艦隊を邀撃し大に之を破り敵艦少くも
四隻を撃沈し其他には多大の損害を與へ
たり。我艦隊には損害少し、驅逐艦水雷
艇隊は日没より襲撃を決定せり。」
これが艦隊の大勝利を國民に報した第一
報である。

言の申譯もない。何とお答へをしたものと困つて居られると、お
弟子の吞仁誠に頼智頼才のある人で、今幕府から御使者が見えて師
の坊が大層困つておいでになるのを見ると、何と思つたか一間に入
ると幾枚かの紙を綴り合せて一冊の帳面を造り上げ、それへ頻りと
色々な名前を書き列べて居りましたが。書き上げるとそれを捧げて
勿體らしくお使者のゐる座敷へ参りまして、其の御咎めに就きまし
ては私から申開きを致します、それはお上人のお弟子に其の御米を
皆遣はしました、左様か然らばその控へでもあるか、これにござい
ます。御覽を願ひますといつて今書いたばかりの帳面を出して見せ
た。何右衛門の伴、何兵衛の伴、とズーツと書き列べてある、此の
弟子は何處に居る、是れだけの弟子は中々此の寺内には入り切れま
せぬから、皆親許へ預けてございます、左様かといつたが徳川家の
役人だつて、上人がお米を賣つて使つてしまつたといふのではな

し、酒を飲んだといふのでもなし、貧民を救つたのだといふ事は聞
いて知つて居りますから、是だけの證據があれば宜ろしいといつて
引上げましたが、是れは吞仁の頼智に依る所で御座います。

徳川家の法律で、鶴は禁制の鳥、鶴を殺せば武士は切腹、百姓町
人は死罪といふ事に定まつて居る、武州岩槻在に、松澤源五兵衛と
いふもの大阪方に味方を致し、戦敗れて一家を引具し岩槻へ落の
び、大小を捨て百姓となつて世を送つて居ります。娘おはつ伴源次
兵衛の親子三人暮し今年には作物の大不作、おまけに父源五兵衛が自
由の利かない中風症、醫者からは六ヶ敷いと注意され途方にくれた
まま野良仕事から歸る時鶴の生血が中風には一見いゝとの話し、孝
子の一念鶴の血を吞ませて快くなるなら自分は御法に觸れ處刑にな
つてもお父さんを癒して上げようと、此の禁制を破り役人に追れて
大光院に隠れ上人の身の上に事が及んで終に吞龍上人、源次兵衛を
連れてお寺を捨て無水身となり、諸國を行脚する事数年なりしが、
觀智國師の願により二代將軍秀忠は吞龍並に源次兵衛の罪を許し、
上人は大光院へ歸山燈明再び輝く。

元和九年八月九日、六十八歳にて眠るが如く、大往生を遂げまし
た。明治二年長くも明治大帝より勅願所に定むべしとの勅諭を賜は
り、近くは大正十五年の春、久邇宮大將親しく御入山遊ばされ、日
の皇子の御健康を御祈願遊ばされました、常は參詣人の絶間ない子
育吞龍上人小傳終り。

信 仰 相 談

擔當 佐藤 良智

〔問〕 御佛壇にお明しを二つあげる理由を御教へ下さい。(東京・一會會)

〔答〕 御釋迦様が八十の御歳をもつて御人滅なされる時に、なげき悲しむ弟子達に向つて、「そう悲しむな。自分の入滅の後には、自燈と法燈とをかゝげなさい。そうすれば間違ひはないであらう」とお告げになりました。この二燈の御教によつて二つのお明しをあげるのだと申します。自分の燈びをとらせとは、人と生れて醉生夢死せず本當にその眞のねうちを發揮せよといふことで、法燈とは、み佛の教え即ちまことの燈びであります。自燈が法燈に一致し二燈が一燈となつて輝く時まことに人生が輝き、

法界が輝くのです。

〔問〕 法然上人の御廟はどこにござりますか。私の様なものでもお参りできるでしやうか。(神奈川・一信者)

〔答〕 京都東山智恵院内にあります。どなたでも自由にお参りができます。

〔問〕 御念佛はなぜ口に稱えなければならないのでしやうか。私は必ずしも口に出す必要はないと思ひますが如何なものでしやうか。(東京・中島生)

〔答〕 貴君の御質問尤もに存じます。私なども永い間口に稱えることの尊さを存じませんでした。宗學では色々説明も致しますが説明より實感によらなければなりません。法然上人は久しい間八萬四千と稱せらるゝ法門を身をもつて御研鑽なされ結局「口稱南無阿彌陀佛」に到達されました。言はゞ一大法門のエキスであります。宗教生活に缺く事の出来ない「信」と「行」とがこの六字の名號を稱することに含まれてゐるの

です。私共の様な全く無力な而も煩雜な日々を送るものが御念佛することにより如來さまの御本願力によつて救ふれるといふ信仰が湧き出るとき、自然に口に御念佛が出て來ずには居ません。法然上人のみ教には複雑な儀式や立派な殿堂は一つも必要ではありません。お念佛が儀式であり、お念佛の聲するところ即ち殿堂です。「所在道場」平常心景道」の徹底したものであります。貴君が上人の御教に接せられることが深くなれば自然に口稱の尊さが感ぜらるゝと存じます。御無理でなく自然にあなたのお口から御念佛の聲のもれ出づる日を念じます。

〔問〕 法然上人様を明照大師と呼び申し上げますのは何故ですかお尋ね致します(一老僧者より)

〔答〕 法然上人の御一代の事蹟は「勸修御傳」四十八巻中に記載されてありますが、その圓滿な御人格御徳は歴代天皇の御宸念遊ば

される所となり、夫々大師號が降下されて
 ゐましたが明治維新後は大師號宣下は沙汰
 止みとなりましたにも拘らず明治天皇は勅
 修御傳を御覽遊されて時に「明照」の大師
 號を法然上人に御宣下になり上人の崇高な
 御人格と明治の御代の明白とを御示しなら
 れました。それ以來淨土宗では法然上人を
 明照大師と申上げて居ります。

御參考までに歴代天皇が法然上人に大師
 號を宣下遊ばされた次第を申し上げますと

「東山天皇——圓光大師——中御門天皇——

東漸大師——桃園天皇——慧成大師——

「光格天皇——弘覺 師——孝明天皇——

慈教大師」で次に先きに申上げた如く

法然上人七百年の御法要の際明治四十四年

二月廿七日明治大帝から特旨を以て更に明

照大師と加諡あらせ給ふたのであります。

〔問〕 私の家は代々淨土宗であります、両親
 ともよく御念佛申しますし私も御念佛申す
 様になつてゐますが最近ずつと病氣勝ちで
 す。それで両親が心配の餘り、方位や家相

や年廻りを氣にして何處かで祈禱してもら
 つてはとか卜つて見ては等勤めますか如何
 なものでせうか(悩める一女學生)

〔答〕 方位家相年廻り等の尊重せられるのは
 御承知の通り支那思想で先入主と申します
 かなか、我々の氣持から迷信だと思ひ乍
 ら取り去らないのですが年廻り等も大體肉
 體の生理的變動期と平行して居て、その時
 期はやゝもすると一身上の失策を來す例も
 あるので合理的にも考へられますが少なく
 とも佛教信仰者のとらざる所です、法然上
 人の御言葉に「人の命は食事の時、むせて
 死する事も有なり、南無阿彌陀佛とかみて
 南無阿彌陀佛とのみ人べきなり」と申され
 てゐますがこれは一擧手一投足自らを滅ぼ
 しつゝあるとの自覺に立つて刹那の中に一
 念一念の往生即ち自己の而も即今の自分
 を切り開いて進む永遠の今に生きる念佛相
 續の生活をせよと御教へになられたので、
 念佛する者の切實な氣持の中には自然と時

間空間のわづらはしさが開けて、従つて家
 相、方位、年廻り等の日和見的な氣持の割
 り込む隙間がない様になります、ですから
 両親の心配には感謝しなければなりません
 が拘泥しない様にし病氣のことはよく醫者
 に相談し療養すると同時に病氣に執られれ
 ぬ様に御念佛を信じ精進されるならば病
 中も安らかですし、漸ては朗らかな健康
 體の生活を喜ばれる日が來ることと信じ
 ます。

信仰上の色々のことについて
 御相談に應じます。奮つて御
 投稿下さい。用紙は官製ハガ
 キ。表には「信仰問答係」と
 朱書すること。送先は編輯
 部宛。メ切・毎月十日。

家庭の衛生……

扁桃腺の話

— 子供に一ばん多い病氣 —

醫學博士 吉原 りゆう子

× 多くの病原を作る

扁桃腺は誰でも知つてゐる通り呼吸器と消化器の入口である咽喉の兩側にあり従つて之等呼吸器消化器の多くの病原を作る臓器であります。口腔鼻腔を通じて外氣に一番觸れ易い處であり、且つ扁桃腺そのものの組織が非常に繊細で總てのものに對して感受性の強いものであるため、外氣の寒暖に刺戟され易いのみでなく、數限りなく現存する鼻腔口腔の細菌に直ぐ感染し易いと云ふ性質を持つて居ります。普通扁桃腺炎と云つて熱を出したり簡単な熱のみでなく敗血症等にまでなる人も

あるのは大抵氣候の變り目殊に寒さに向ふ時であります。此の腺の強弱は其の人によつて異つてゐて日常弱い人は一寸身體の抵抗の弱つた時、例へば胃腸を損ねたとか風邪にかゝつたとかした時に周圍に附着してゐる細菌に侵されるのであります。

× 子供に一ばん多い病氣

扁桃腺の病氣の種類は簡単な（咽喉が腫れる程度）急性の扁桃腺炎と慢性の扁桃腺炎（常に扁桃腺が肥厚し腫脹し居るもの）とに分ける事が出来ます。尙急性の惡性のものになれ

隨想筆

變つた釣師の話

一週に一度、休みの日にこゝへ出かけて来るのが、一番の楽しみでしてね。たゞ生活の楽しみだけではなく、斯うして水面を見たり向岸の風景を眺めたり、空を仰いだり、ふと白いちぎれ雲が頭上を掠めたりするのを見てゐると、初めのうちは氣の抜けたやうにボンヤリしてゐますが、ボンヤリしてゐる間に日頃の塵芥が抜け落ちてしまひ、そしてあとにはスガ／＼しさだけが残るのです。自然と周圍がしづまる。心の平靜が得られる。そして恐らく私だけの世界を實際に見、その中に浸たりきつてゐることが出来るのです。つまり私はこゝに淨土を見るのです。もう單に生活の楽しみだなんてしやれた言ひぐさではなく心がスミ／＼まで澄んでゆく。日々の煩瑣な生活がそこで清められてしまふのです。

こんなにして何時も釣竿を垂れてゐるのでよく通りかゝつた人々はたづねてゆきます。今日のヒキ工合はどうですか、今日の獲物はどうかですか、中には通りかゝりの子供が何んだ一匹もとれてやしないなどと野次つて

ば、化膿性の扁桃腺炎となり、全身の發熱強く、慢性に移行するのがあり、或は化膿菌は全身にまわり恐ろしい敗血症等を引き起し死に至る事もしばしばあります。

扁桃腺肥大は急性のものより移行されてもしばしば膿病性體質に發見します。

殊に子供には之が驚く程多いのであります。膿病性の子供は常に弱く胃腸を患ひ身體の抵抗力が非常に弱いので一寸した氣候の變化でも風を引きます。昭和八年度の東京市の調査で小學校の兒童に一番多い病氣が扁桃腺肥大で、次に頸腺腫脹の多い事が示されてあります。之は膿病性體質が如何に多いか即ち潜伏性結核を持つ虚弱兒童がどれ程多いかを物語つてゐると云つて差支ありません。それ故大人ばかりでなく子供の扁桃腺肥大は大きく云へば社會衛生の改革に當つて一ばん大切な病氣の一つであるといふ事が出來ます。親達及び學校の先生方は子供が扁桃腺肥大を持つてゐるや否やを一番に氣をつける事が肝要であります。

尙慢性のものは鼻又は耳の疾病をも引起す事がしばしばあります。

× 内分泌作用に關係あること

扁桃腺はそれ程體質に關し、殊に子供の一番多い病氣の原因になる程の臓器でありますから、身體の健康に對する心臟程でなくともかなり重要な臓器と考へられます。それで、近頃の學者は扁桃腺は(生理的の)一種の内分泌作用を營み、血液中に一種のホルモンを分泌するとさへ云つて居ります。

又慢性の扁桃腺炎のある人に良く盲腸炎を見ることがあります。それで或學者は盲腸炎は時に扁桃腺が原因するものださへ云つてゐる位であります。咽喉と盲腸部とそれ程、距つた場所で直接關係が無い様に思はれますが、或は扁桃腺炎を起してゐる細菌が消化器又は血行を通り盲腸部へ行くのか、それとも扁桃腺炎のため扁桃腺の機能がか弱くなつて

ゆきます。然し私にとつて釣はどうでもよいのです。好んで殺生などしたくはありませんからね。釣針を垂れてゐる。ウキが水面に浮いてゐる、微風が線を撫で、ゆく。それを上から何んの目的もなしに、つまり清められた心が眺めてゐるのです。小魚は針の餌をつよく。その度にウキはビク／＼と水面ををどる。それを斯うしたまゝ眺めてゐるのです。ウキの作つた水面の水輪が靜かにひろがつてゆく。それを追つてゆくと、つまり小さな水輪が大ききく育つて、その中に私は人の見ないものを見付けるのです。そこに淨土の世界を見出すのです。

ところが煩い人間がゐましてね。實際この世の中は煩い人間がどう慾目に見ても多すぎますよ。隣の人は私の釣の餌を喰ふさまを見て、もう氣が氣でなく、人ごとのやうに思つてゐられないと見え、早く竿を上げるとか、何をボンヤリしてゐるのだとか、注意どころか、遠慮會釋なく叱り付けるのです。私は平氣です。その點變つた釣師です。

谷があり、川がありさへすればどんな場所でもいゝかと云ふと、矢張さうではありませぬ。私にはこゝが一番選ばれた場所、自然の興へた恩澤です。或は他へいつても同じ世界

その弱つた處に盲腸炎を起す様な胃腸の條件が備はるために盲腸炎になるのかも知れませんが。然し又一面には扁桃腺炎のため扁桃腺の内分泌作用が弱くなつた爲め直接間接に病氣を引起すのかも知れません。兎に角それ扁桃腺と云ふものは簡單なものでなく、色々複雑した影響を全身に及ぼすものだと言ふ事が次第に研究されつゝあります。

×扁桃腺炎の豫防

前述の様に小供に最も多い病氣ですから、五、六歳から小学校位の小供に最も注意を拂はねばなりません。

斯る小供は體質が悪いのですから根本的に體質を良くするため外氣に觸れさせ、日光浴を良くさせる事が一ばんと思ひます。

市中の小供なら一週、二回位は郊外に行かせるとか、或は小供によつては郊外の學校を特に選んで、はせる方法もよい事です。

此外食事睡眠を充分規則正しくしなければ

なりません。胃腸を健康にすると云ふ事が先づ第一條件だと思ひます。

尙理想を云へば、市内の小供のためなら屋上にサンルームでも作り、一日の間に時を決めて日光浴をさせる事も一つの方法であります。

斯うして體質を改造すると同時に扁桃腺の局所の手當をもしなければなりません。

即朝晩一乃至二プロセントの硼酸水（普通水飲コップ一ぱいの水に硼酸の粉末を茶さじ三分位）の含嗽をさせるとか、若し慢性の肥大を起してゐる場合は時期を見て炎症部分を切除するとか、又日常氣をつけて扁桃腺に藥を塗るとか云ふ様な局所の手當を怠つてはなりません。

×急性炎症の場合の手當

若し急性の化膿性炎症の場合は、早く醫者を訪問して治療しなければ取り返しのかぬ事があります。時によつては聲も出ぬ咽喉

を見出すことは出来るかもしれませんが、このやうに、この川岸へ出るまでの丘をのぼつて來ることが更に私にとつて大切なことなのです。人の心は道をのぼる時云ひしれぬ喜びを抱き勇氣がわくものです。それを日常の生活の羈絆に常嵌めて見る。何かしら道をのぼつてゐるだけで生活の進化をおぼえる。こゝで云か意味も單に世間的意味の進化ではないのです。澄明な心境にも進化は必要です信仰の一番美しく強いものは純眞に燃える炎の中にあります。その熱の眞赤の中にのみ籠つてゐます。云はゞこの丘を越えて來るのは私の生活の進化と同時に、心を澄ますその熱度をも意味してゐます。

さて、さうして丘を越えしつかりした足どりのもとに變つた釣師となるのです。

私は何も水面に淨土を見ると云ふやうな、幻想的な世界に自らを甘やかしてゐるわけではありません。こゝに至つた動機と云へば云へないこともないのですが、それは母の念佛と一人の子供を失つたことが、私をしてこゝへ連れて來させた絶對の腕力でした。

母は田舎にゐた頃、丁度私の子供時分です土蔵に佛壇が祭つてあり、そこに端座して念佛を暇さへあれば唱へてゐました。小さな

が腫れて扁桃腺周囲炎（又は蜂窩炎）を起す事があります。斯る場合は早く切開し排膿するを要します。勿論専門醫により毎日排膿してゐる中に下熱し、治りますが、一旦之にかゝると治つた後も屢々軽い扁桃腺炎を患ふものであります。故、簡單な風引きでも決して忽せに出来ません。之等の反復から全身の健康を失ふ事は申すまでもなく、つまり潜伏性結核を芽生えさせ、氣管枝淋巴腺が腫れたり肺結核の源をなす場合が數多くあります。結核の原因にはまだ色々ありますが、其の原因の大部分が急性慢性の扁桃腺炎にあると云つても過言ではありません。而して結核と云へば、世界各國で撲滅に困つてゐる難病の第一のものであり最も多い世界文明病でありますから、先づ各個人々々が咽喉を大切にすると同時に兒童の家庭の両親はより之を忘れてはなりません。やゝもすると小供の體質をも考へず、虚榮の母親はやたら勉強を強ひて、所謂世間で云ふ評判のよい學校へとすゝめるものがあります。大變な過りだと思ひます。

尚合併症として、中耳炎、蓄膿症を起せば頭腦等にも關係する故に、合併症のあるらしい時は、それ／＼専門醫により充分な手當をなさねばなりません。

少しでも發熱がある時は氷で外から冷す事は最も大事な事です。單に濕布は左程効がありません。それよりもむしろ含嗽をしたり吸入をしたりするのが、最も効果的であります。

吸入薬は、一乃至二プロセントの硼酸水、又は重曹水、或は食鹽水でもよろしいのです。小供が健康でも學校から歸つて來たら直ぐ含嗽をさせる事をおすゝめ申します。その時は鹽水でも番茶でも或は何もなければ、水でもかまひません、之は、小供に自ら習慣つける様に願ひ度いので御座います。

岡本かの子氏。一平氏夫人。夙に歌人として令名あり。又佛教研究に精進せられつつあるは周知にして、その著多し。佐藤春夫氏。我文壇の一巨峰。近來淨土宗の信仰篤く、「觀無量壽經を語る」の著書を出す等、入信生活に邁進せらる。

しつかりした聲で唱へてゐるのです。母の一生は信仰の中に生き、この念佛信仰をさしぬいては母の生涯と云ふものが、更に貧しいものとなつてしまひます。暗い土藏の中にゆめく燈明の炎は私の幼い心に深くきざまれ、今でもよく目前に浮びます。一時はそれを非常に煩しく思ひました。若さの至らなから、今は家族を持ち、斯様な社會と現實とに生活をたてゝゐる私にとつて、この上ない感激となつて母の姿が現れます。それから一つ強い吸引力となつたものは、初めての子をとられたことにありました。これは他のどんなことを持つて來てもかけがへにして考へることは出来ません。それが信仰の心をもつてかけがへにしたところ、子供の死に對して悲しみのうちにも又違つた眼をもつて迎へるやうになりました。これも感謝一つです。母の姿と子供の死は既に私の肉體にまでなつたかのやうに思はれます。

私はある役所の安月給とりですが、一週一度の眞の喜びがあればこそ、將來にむかつて積極的な心構へでゐられるし、現在もほこらしげに目を暮すことが出来るのです。云ふまでもなく私は念佛信者です。（浦田）

往 生 繪 日

卷 己



十一谷 主我三郎作
主月柳 士郎 兵衛画

——いのちつくる断末魔のとき眼くらみ舌すくみ黒闇と
なる。岸よりおつるごとくにてひとり曠野をゆく。これ中
有の旅なり。妻子も財寶も相添はず。罪人のさけぶ聲、獄
卒の責る音ほのかにきこゆ。泣々のぼる死出の山たゞひと
りゆきなんすれとはこの時なり。杖をもとめ履をねがへど
も無し。葬のとき杖と草履を入れ やるもならひ久しきこ
となり……

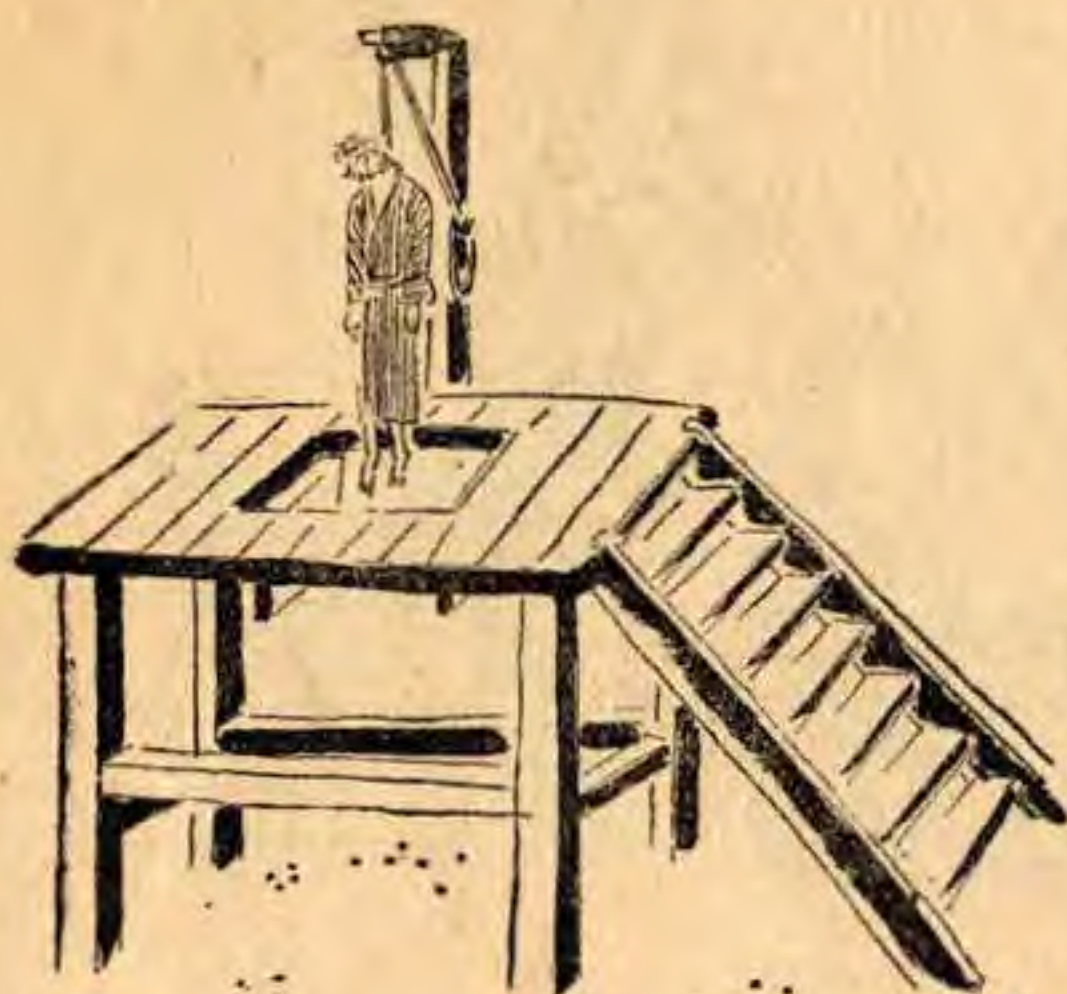
1 くび縊り上人

死刑囚のはなしを聞いた——

死刑を執行される者はだいたいに十人から三十人前後に
のぼると云ふが、その男女がほとんどみな、いつたんその宣
告を受ける、まことに温和しくなると云ふ。刑の定まるま
では随分泣きもし、騒ぎもし、苦し紛れの妄想を描き、虚こ
とを云ひたて、喚き、罵り、呪ひ、悶搔いたものが、びたり
と静まつて、まるで生れ變つたように扱ひよくなると云ふ——

—それが多くの例だと云ふ。

死刑のだんどりは、刑が定まつて数日、監獄に入れておき、いざ執行の朝になると、いつもと違つて赤い飯をたべさせるそれが濟むと教誨師の説教がある——もう君がこの世で犯した罪の償ひは、けふで濟むのだ。潔く清算したまへ。新しい世界が君を待つてゐる。君は淨らかならだとなつて微妙莊嚴の淨土へ往くのだ。君の蓮臺の花びらは紅蓮白蓮青色



青光 黄色 黄光 朱 紫にいまを盛りの色を見せて君を待つてゐる。紫の雲の絞首臺のうへになびくであらう。異香があたりを薫じるであらう。樂の音が虚空にひびくであらう。さうして君のけふのこの門出を祝福するであらう。さ、歡んで往きたまへ。

それから看守のなかに挟まれて牢を出て、その極樂の高架式プラットホーム——絞首臺の、手前にある佛堂のまへへ連れてゆかれる。そこで念佛を云つて水を呑む。さうして絞首臺へ引立てられる——臺は地上九尺、いく段かの段々をのぼるのだが、囚人に依つては足が戦き腰が萎へて、これがのぼれないと云ふ。臺上には一坪ばかり限られた部分があつてそのまんなかたに立たされ、白紙で眼隠しをした上を白布で括られる。とたんに仕掛けの、絹でつくつた索が二本、彼の首にかゝる。それでいつさいの準備が終りだ。刑務所長が時計を覗いて、執行！と呼ぶ。看守の手の横杆がうごく。と——くだんの一坪ばかりの板が囚人の足の下にまつ二つに割れて、囚人のからだはその首に喰ひ入る二すじの絹の索に依つて宙釣りとなる一分二分三分四分……

刑務所長も検事も典獄も看守も、教誨師も、むろん、



奇蹟は見ない。監獄が、檢視を終つて、その屍を、縁者か獄丁へさげてしまふ——

刑の確定した死刑囚の心理とはどのやうなものであらうか？——不可抗的な強大なるものに依つて、いつさいの執着を絶たれたる世界、不可敵なる力に依つて、意志の根を奪ひ去られ、たゞもうその枝葉だけが支離滅裂に、心頭を漂泊流離する世界——かの北寒の地の大河のほとりに見ると云ふ白夜——夜の闇も稀薄、晝の光も稀薄、たゞ薄粥のそののやうに、儚なく淡々しい世界、生活が九分どほり窒息して盲目的な生理現象だけが生きてゐる若存若亡の世界——おそろくはそんな風であらう。さうしてそこに遺つた一片の意慾、願望の力の聲を聴けば——典獄さま、教誨師さま、どうぞ一日もはやく死なせて下さいまし……？

わたしはあの頸縊上人のはなしを想ひ出す——それは道心堅固な上人であつた。こんな世の中に存らへて何の甲斐があらうと云つて、三七日のあひだ無言の行をつゞけ、終りの日に頭を縊つて死なうと誓ひを立てた。さうして道場に籠つてしまつた。その噂が遠近に鳴りひびき、尊い聖



が上人のために往生講を起して、そのありがたい素願の成就を翼はれる。二三の他の上人達は、また共に道場に籠もつておなじ行を修される。かの上人はと云へば行の最中だからむろん口はきかないで紙に書いて、念佛往生を諸人に勧めたり如法に修業せらるべしなど云ひ、人々の感涙を誘ふ——みことな精進ぶりだ。

さて日數も満ちていよいよ最期の當日が來た。上人は行水に身を淨めて時刻の至るのを待つ。外にはこのありがたい臨終を拜して結縁しやうと僧俗貴賤のともがらが奔走とつめかける。

そのとき同行の上人の一人が、當の上人に向つて懇ろに云つた——

——道心堅固にお見うけもうすから、別條はござるまいがお互ひ凡夫の身ぢや。もしや心がりのことどもあつては臨終の正念に障る。もはや無言もやめて御本心をありやうにお打明けなされて往生の本懷を遂げたまへ。臨終もしあやちあつては折角の行も詮なきことゝなりもうす。

——すると上人が答へた——

——いかにも凡夫の心ぢや。はじめ思ひ立つたその時は、こゝろ甚勇猛にて、一日もはやく臨終して、このあさまし

き世をば遁れむと、それのみ専ら冀うてゐたに、このころは心も弛み、いそぎ死にたうも無うなつた……

その言葉が障子の外に躍まつた弟子の耳に聴えた。弟子が猛りたつて怒鳴つた——

——いまさら、なんとなりませうぞ。あれあの境内に溢れたる善男善女の群集がお目には入りませぬか。さては御往生を妨げんとする天魔の所爲歟。はやう御誓ひの言葉のとほり御臨終を諸人にも拜ましめたまへや！

弟子が怒鳴るのも道理だ。御堂のまへの庭の榎の枝には、もう白布を纏うた縄が懸けてあるのだ。その下には白木の踏臺まで持ちだしてあるのだ。その周囲には數尺の空地を残して、善男善女が十重二十重と雲集してゐるのだ。それがみんないちやうに先刻からその、薄暗い古木の枝に捲きついて垂れた白縄と、下の地べたの白木の踏臺と、こちらの御堂へ、熱病を思はせるやうな眸を、等分に凝注してゐるのだ。それらの人々の、呻くやうな、絞り出すやうな、低い念佛の聲が潮の遠鳴りのやうに寄せて來るのだ。もう雰圍氣がのつびきならなくなつてしまつてゐるのだ……

上人の唇になにやら未練らしい言葉がもつれて消えた。上人は追はれる人のやうに起つて出た。

にぶく低くかぶさつた空のあちこちから、惡熱を孕んだ太陽の光線がぎらぎらと落ちてゐた。群集の念佛の聲が怒濤のやうに涌きたつた。上人はそれらを見も聴きもせなんだ。上人はこれらの情景のなかに闇あく樹つてゐるかの榎の古木へと、反射的に寄つていつた。その蒼ざめた唇に念佛が痙攣し、風の無いその足もとを、まるで瘦せ犬の肋を抜けるやうな風が吹いた……

上人は白木の踏臺に搔きのぼつて、くらくらとなる眼さきの、白い綱り縄を、手さぐりにむづと掴んで、爪さきで立つて、とがつた腮をその白い縄にかけた。

——お手を……！

踏臺のわきの地べたに蹲くまつたくだんの弟子が、血走つた眼でくわつと睨みあげて、さう、吐き出すやうに叫んだ。

上人の兩手が縄を掴んだまゝ細白く硬直してゐるのだ。それがその聲に、愕然と掌をひらく、とたん——

——南無……！

弟子が踏臺を拂つて、がばと地につゝ伏した。

その頭上の空間に、白衣の肉體がびこんと揺れ悶搔き、やがて伸びた片脚の爪さきをあげ、片膝を少し折り曲げた、そんな恰好でだらりと上人が、その闇い榎の枝からぶら下がつ

た……

大きく擴ごつた幾百千の善男善女の眸が、一瞬、その上人へ釘づけになる。みんなの額にあぶら汗が滲み、百千の心臓が一時に停まつたやうな沈黙……。やがてまた念佛の聲が怒濤のごとくひびきわたり、感涙がひとびとの合掌した手の甲にはふり落ちた。いつまでもその境内の群集の法悦はつゞいた——もう上人の藍死體の顔のまはりに銀蠅が群れてゐたが。

2 鬼熊往生

名も無い開墾地の貧乏村の荷馬車輓の熊次郎は、もともと名も無い開墾地の貧乏村の荷馬車輓相應の男ッ振りの男であつた——いつしよに呑んだつて決して他人には拂はせない、それだけの意味の兄貴肌の人気男であつた。

その、草臭い、どぶろく臭い、見榮坊の、荷馬車輓が、あれだけ日本中を涌かせたのだ。あゝして大正十五年の夏から秋へふたつきに跨がつて、あらゆる大新聞の社會面を、この荷馬車輓が攫つてしまつたのだ。彼が死ぬ氣になつたのも無理ではない。

彼は情婦aの髪のを掴んで戸外へ曳きすり出して薪で彼

女を撲殺した。その足で、いつか彼と彼女の仲に立つて彼女の肩を持つた男の家に放火した。その足で駐在所の留守宅へ押入つて佩劍を偷み出し、彼が會て彼の遁げた情婦と密語の巢を營んだ家へ趨り、その主を呼び出してこれを斬殺した。すべて八月十九日午後十二時前後の兇行で、その夜のひき明け方に、彼は非常線にひつかゝり、一人の刑事の額に二ヶ所二ノ腕に二ヶ所、みな骨膜に達する重傷、それに左の人差指に骨までの切傷、右の拇指にひどい咬傷を負はせ、そのまゝ近くの雜木林へ隠れてしまつた。

(これは後の話だが別に彼は巡查を一人、利鎌を振つて残殺した。)

これが、彼の罪狀だが、これだけなら、市井の一小事件の主人公であるだけで、新聞もあれほど彼を英雄にはしなかつたらう。ところが、その彼が九月の三十日まで捉まらない。ちよいと姿を見せながら捉まらない。おとなしく、犯罪人らしく、遁げ隠れするだけではないのだ。凄味な殺氣が、その彼の足跡に、なほくすぶつてゐるのだ。彼が撲殺した情婦その情夫と、彼を捨てた情婦のもとの雇ひ主と、この二人の男に對する未遂の殺意を、はつきりと示しては姿を消すのだ。

それもいい。所詮は三面的な痴情沙汰だ。まいにち新聞の紙面のうへを、むすんでは消え、きえては結びゆく水の泡沫のやうな事件の一つだ。

が——それにしては、萬事が大掛り過ぎた。數字的に要約してもこんな風だ——

彼の踏晦した山林地帯——つまり捜査區域と云ふのが、周圍二十六里餘、面積にして五千四十四萬五千八百坪。

動員した警察官が三百、その延人員が六千八百九十九人。別に消防組員が三千名。

それらに依つて行はれた山狩が二十五回（うち消防組参加五回）、木小屋や洞穴や空家などの檢索がまた二十五回、立まはり見込地域内の戸數が千九百十七軒あつたが、それを戸別に捜査すること十四回乃至三十四回。

この經費合計三萬三千四百二十八圓。

新聞各社からの特派員が五十餘人。

事件後この草と血と女の匂ひのする荷馬車輓の記録が——赤本が、街の夕刊賣場で、十何萬冊賣れたと云ふ。

この數字上の大舞臺の他にちやうど季節が逃へ向きだつた——世間の頭が、夏の太陽にシビれて、毎日、何か強烈な、殘虐な、凄味な、闇い謎につつまれた戰慄を、渴望してを

つた。荷馬車輓はその慾望を十二分に充した——開墾地の夏草に影を没して、瓜や西瓜や唐もろこしの實を喰ひながら。未開墾の密林の、厚味を増した葉隠れに潜みながら。いや、それに、冒頭に記したとほり、彼は元來、草臭い兄貴肌の男でその日頃の男ツ振りの崇拜者らが、そつと梅干や握り飯や、菰や草履などなどの實意を運んでゐたのだ——だから、この荷馬車輓は、世間が炎暑のためにぞつとする刺激をもとめてゐるあひだちう、それを提供し得たのだ。さうして野わきから、そろそろ朝ごとの新聞紙が白く冷い感觸を傳へるころ、世間が夏の太陽の魔痺から醒めたい、潮どきに、その舞臺を退場したのだ……

わたしは頸縊り上人の話から、荷馬車輓熊次郎の最期を聯想する——

大正十五年九月二十五日のゆふぐれ——村の消防組の部長の家の土藏のかけに、鬚ぼうぼう、髪ぼうぼう、頬のげつそりとコケた、眼の爛々と光つた熊次郎が蹲くまつてゐた。

——おれは、もう駄目だ。おれは三日のうちに死なうと思ふ。生れた家で死にたくなつた。兄に逢ひたい。身内の幾さんにも逢ひたい。



ふつと戸口を出たその消防の部長に、熊次郎がさう云つた。部長があはれに思つて、その幾さん呼びにゆき、村の火の見櫓の下夜闇のなかで、三人が話した。

——熊さん、もう自首したらどうだ？ おれたちはその方がいゝと思ふ。

——厭だ。おれは死ぬんだ。

——さうか……。いつたいどんな風にして死ぬつもりだ？

——おれは剃刀を持つてゐる。これで喉を切らうと思ふ。

しかし、もう錆びて切れさうにない。幾さん、おまへこれを磨いて来て呉れないか！

幾さんが承諾してそれを受け取つた。その夜は熊次郎をその裏山へ隠して、幾さんが握飯三個と漬物と菓子を一袋と草履一足を運んだ。

あくる日の夕方、幾さんのところへ、ある新聞社の通信員が訪ねて来た。通信員は特有の鼻で、熊次郎と幾さんの関係をかき出してゐた。さうしてうまく工作して幾さんをすつかり彼の通信筒のなかへまるめこんでゐた。

幾さんがゆふべ知つた熊次郎の動静と心境とを洗ひ浚ひ話して聽かせた。通信員の職業意識がびりつと動く——他社を出し抜いて、熊次郎自首もしくは自殺の状況を報告し、自分

の腕を示さねばならん。當分熊次郎を官憲の手に渡してはならん。自分の手で自殺させるか、自首させるかして、その報道を自分と自分の社で独占せねばならん……

通信員は、その翌日、このあたり一帯にかけて山狩の行はれることを探り出してゐた。それを幾さんに話し、暗に熊次郎を他へ移せと仄めかしておいて、明朝を約してひきとつた。

そのあとで、幾さんは鳥飯と焼酎一升とを持つて熊次郎の潜伏場所へゆき、いつたんひき返して、深更の午前二時ごろ。もういちど、これも熊次郎フアンの同僚消防員一人と共に熊次郎に逢ひにゆき、その場から彼を捜査區域外の山林に移した。

その朝の八時ごろ、通信員が、幾さんの案内で熊次郎に逢つた。通信員は日頃の職業的な頭と舌とに最大能率をあげさせて、熊次郎の行狀を褒め讃へた——女殺しの素晴しさ、男殺しのみごとさ、またあの鉄を握つて消防員を追つ拂ひ、敵の家の焼け落ちるのをビクともしないで見とどけた放火ツ振りの膽のふとさ、戀敵やらその一味の者を、これほどまでに縮みあがらせ、悠々と跡を晦ましつゞけた心にくさ、當局をこんなに神経衰弱にし、疲れさせ、狼狽へさせ、血迷はせ、日

本國中の視聽をこんなまで一身に蒐めた男ッ振り——熊さん、もう澤山ではないか。名乗つて出てやりたまへ。お釋迦さんが山から出たやうなものだ。世間も拜む。警察も拜む。なにその邊の草ッ葉みたいなケチな野郎なんかといつしよにするものか……！

熊次郎が言下に答へた——

——厭だ。おれは死ぬんだ！

通信員が即座にその吐を讀んだ。そしてまた唇をひるがへした——

——よろしい、死にたまへ。立派に死んで呉れ！不足だらうが僕も男だ、君の最期は見とゞける。そしてわが百萬讀者に、その君の最期の模様を、くわしく報告する。決して犬死なんかさせはしない。旅順口陥落みたいに號外も出す。寫眞も載せる。でかでかと君の名を特別大活字で刷る。そして津々浦々まで君の男を謳はせる。さうだ、日本中が、君の名のある號外で埋まるんだ。滅多にあることぢやない。誰にも出来ることぢやない。熊さん、さ、死んで呉れ！……

熊次郎はひどく乗り氣になつた。途方もない英雄に祭りあげられた自分のすがたが、彼の眼さきにちらついた。幾さんに磨いで貰た剃刀で鬚を剃つた土氣いろの頬を歪めて焼酎を

煽りながら、彼はうん死ぬ／＼死んでやらアと云つた。しかし、その夜は、焼酎がまわり過ぎて、眠つてしまつた。

あくる晩の十一時ごろ、通信員と幾さんともう一人消防組員が、熊次郎を肥作場へ連れてゆき、そこでまたひと煽り、通信員が煽動した。熊次郎は剃刀を握つておのれの首筋を五六ヶ所斬つた。血が薬や夏草のうへにぼたぼたと落ちたが、傷が浅くて死ねない。熊次郎は首を絞ると云ひだした。さうして側の松の樹の枝に兵古帶をつるして、その樹に攀ぢのぼつた。彼は兵古帶に首を懸け、両手で枝をしつかりと握つてぶらさがつた。

——熊さん、手を放せ。手を放したら死ぬるんだ！

通信員が、もどかしさうに叫んだ。しかし熊次郎は、手を放さなかつた。ぶらさがつたいまこの瞬間に、自分の大きな影坊師が、英雄のまぼろしが、あとかたもなく消え失せてしまつたのだ。のみならず、自分が、凡人以下に小さい無力な心ぼそいものに思へて來たのだ。意地も、瘦我慢も、見榮坊も、もうそんなことを云つてはをれない。たゞ聲を放つて泣きたい。小供みたいに縋りつきたい……

——熊さん、手を放すんだよ！放したら死ぬるんだ、熊さん！

通信員が叫びつゞける。

熊次郎はさう云はれゝば云はれるほど、骨も折れよと松の枝を握り締めた。

——熊さん！さ、すつぱりと死んで呉れ！君も男だ！

——う、う、手、手、手が放れ……あ、足を、ひつぱつて

呉れえ……

熊次郎が、世にも情けない聲で、さう頼んだ。

血眼になつた通信員が、慌たゞしく幾さんともう一人の消防組員を顧みて、ふたりで足をひつぱつて遣つて呉れと云つた。お禮に三百圓くらいは出してもいゝと云つた。

幾さんと消防組員がうなづいた。さうして双方から熊次郎の足首を掴まうとした。とたん——熊次郎が、ぱつと跳ねてその足を松の幹に捲きつけた。

——おれはもう首を縊るのは厭だ。ほかの方法で死ぬ。

「鬼熊逮捕さる」の號外が全國に配布されたのは、この翌々日の午前であつた。

熊次郎は世間と當局とをまつたく手持無沙汰にする状態に於て逮捕された。彼は生家の墓地から十一間ばかりはなれた松や雑木の繁つた丘陵の中腹に頭を西に、藁蓆を枕にして、仰

向けに虫の息になつて倒れてゐた。衰弱したからだだが、局部的に冷い痙攣を起してゐた。あたりに吐き散らした嘔吐を分解したら、米の飯と茄子の漬物と饅頭のアンとストリキニーネとを發見した。

熊次郎は逮捕されてから七時間ばかりして、兄の家の疊の上で靜に往生した……

(第一回おはり)

執筆者紹介

十一谷義三郎氏。我文壇に獨自の地位を占むる一異彩。「唐人お吉」は遍く人口に膾炙するところ。

大谷梅庵氏。趣味講談研究家。

結城令聞氏。東大印哲科出身の新進佛教科學者。

吉原りゆう子氏。醫學博士。産婦人小兒科専門醫。

佐藤賢順氏。大正大學講師。「理想派」少壯哲學者。

翁久允氏。聖跡研究を以て知られたる文學者。

佐藤良智氏。大正大學講師。新進佛教科學者。

高瀬承嚴氏。大正大學講師。佛教文學研究者。

眞野正順氏。大正大學教授。法然上人續仰會常任理事。

北林透馬氏。新進のユーモア作家。

中村 辨康

一枚起請文講義

(第一回)

(お讀みになつた後で製本なされば、立派な講義書となつて一生の信仰の導きになります)

(一) は し が き

一枚起請文の講義とか註とか云ふ類は非常に澤山ある。淨土宗と眞宗のとを合せる
と百十六ほどあるらしい。無論此中には寫本もあるが、佛書解説大辭典に擧げて居る
丈でもそれ位だから、まだ隠れて居るものをも想像すれば、すばらしい數になるかも知
れない。

各宗の祖師の書かれた信仰書への註釋書の數から云つたら、三百からある選擇集と
此の一枚起請文に比敵するものは無からう。隨てこれが如何に多くの人々に關心を持
たれかがほど想像せらるゝ譯である。其中でも代表的のものは淨土宗系丈で云へば、
聖閣禪師の一枚起請文註、聖聰國師の一枚起請文見聞、忍徵上人の一枚起請文諺論、
義山上人の一枚起請辨述、關通上人の一枚起請文梗概聞書、法洲上人の一枚起請文講
説、的門上人の一枚起請文資講などである。

私は今はかゝる先徳の書かれたものに依らず、勝手に卒直に書いて見たいと思つて
居る。それは決して先徳を無視して居るのではない。成るべく現代人に納得の行くこ
とを中心としたいからである。昔の人は阿彌陀佛の存在に就ては誰れも疑ふものがな
かつた。然し現代人はなまじ科學の洗禮を受け、すつかり世界觀が更はつて仕舞つた
爲に、どうすれば信仰に入り得るかの問題も大分趣きを異にして居るのである。

然し私は信仰も浅く、學解もないから、唯だ心で思ふばかりで、丸つ切りくだらないものになるかも知れない。其邊は大方の御叱正を御願ひしたいものである。

(二) 由 來

一枚起請文は法然上人の述べられたもので、凡そ二本ある。一は京都の黒谷金戒光明寺に傳はるもので、「一向に念佛すべし」の本文の次に別の行で「爲證以兩手印」と題して、「淨土宗の安心起行此の一紙に至極せり、云云建曆二年正月二十三日 源空」と云ふ誓言が添へられて有るもので、他の一本は「一向に念佛すべし」までであとの無いもの、即ち法然上人行狀畫圖卷四十五、和語燈錄、一休和尚本其他にあるものである。傳説では法然上人が讃岐への御流罪が御謝免になり、勝尾寺に居られた時、歸洛の院宣が頓に降るのに加へて、既に御年七十九歳で大變御老衰にもなられたので、建暦元年の十二月に御歸洛遊され、翌二年一月御病氣にならせ給ひ、最早や御往生も間近かとも思はれた時、最後まで常隨給仕して居られた勢觀房源智上人が「近來師の坊の眞説なりと云つて、頻りに邪義邪説を説くものが、輩出して困ります。上人様の無きあとになりますれば、一層邪義を立てるものも多くならうかと存じます。誠に恐れ入りますが、一筆御遺し遊ばしますやうに御願ひしたう御座います」

と懇請せられたので、御歿くなりになる二日前の廿三日に書かれたものがこれである
と云はれて居る。一説には勢觀房の傳承した「淨土隨聞記」の結論的訓話とも見られ
るから、或ひは建曆元年十二月御歸洛早々の事ではないかなどとも云つて居る。また
法然上人傳の内「九卷傳」と稱するものは「建曆二年正月二十二日」の事として居る。

(三) 本 文

もろこし我が朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、また學
問をし念のこゝろをさとて申す念佛にもあらず、唯だ往生極樂の爲には南無阿
彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の子細候はず、但し
三心四修と申すことの候は皆な決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に
籠り候なり、此外に奥深きことを存ぜば二尊のあはれみにはづれ、本願に洩れ
候べし、念佛を信ぜん人はたとへ一代の法をよくよく學すとも一文不知の愚鈍の
身になして尼入道の無知の輩に同うして智者のふるまひをせずして唯だ一向に念
佛すべし。

爲證以兩手印

淨土宗の安心起行此一紙に至極せり、源空が所存此外に全く別義を存ぜず、滅後の
邪義を防がんが爲めに所存を記し畢んぬ。

建曆二年正月廿三日

源空在判

(異本)

上人の給はる念佛往生と申す事は、もろこし我朝のもろもろの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念佛にもあらず、又學問をして念佛の心をさとりとほして申す念佛にもあらず、たゞ極樂に往生せんがために南無阿彌陀佛と申してうたがひなく往生するぞとおもひとりて申すほかに別の事なし、ただし三心ぞ四修ぞなど申す事の候はみな南無阿彌陀佛にて決定して往生するぞと思ふうちにおさまれり、たゞ南無阿彌陀佛と申せば決定して往生する事なりと信じ取るべき也、念佛を信ぜん人はたとひ一代の御のりをよくよく學し極めたる人なりとも、文字一も知らぬ愚痴鈍根の不覺の身になして尼入道の無智の輩に我身をおなじくして、智者の振舞をせずしてたゞ一向に南無阿彌陀佛と申してぞかなはんず云云

(筑紫物語集、和語燈錄等に出づ)

(四) 講 義

(イ) 人生への疑問

凡そ人間に取つて人生ほど疑問の大なるものはない。
生きて居る儘に何の事も考へず、唯だ現實を追つて居る丈なら、そしてそれ丈を醒

齟齬して終に一生を終らしむるなら、人生位馬鹿氣切つたものはない。

其人がたとへノホホンで死んで行つたにしろ、それでは餘りにかあいさうであり、氣の毒である。

況してそれに氣付き、其疑問を解かうとする者にとつては寧ろ生命を賭してもおしまぬ程の重大問題である。

人間は一體何の爲めに生きて居るのか。

一體私達は何の爲めに毎日毎日を送つて居るのか。

生きて居てどうなるのか。

其の上死んで仕舞つたらそれ切りではないかとさへ考へられるのである。

またその反對にこんな氣持も働きはしないか。

即ち

死んだらどうなる！。

此儘死んでは死に切れない！。

と云ふのである。

かうした兩面の氣持は私達の内面の鬭争となつて、眞面目の人である限り何時も心の中は修羅の巷である。

更に靜かに考へて見る。

私達の現實生活は正しく六道輪廻の生活である。或時は瞋つて苦しみ、或時は欲心に我を忘れ、或時は愚痴に泣き、或時は些細な事に人と争ひ、或時は有頂天になつて浮かれ、或時は怨らみ、或時は慢り、或時は疑ひ、或時は悲しみの底に沈む。轉々としてその定まるところなく、嫖々として風のまにまに従ひ、此世をさながら六道輪廻しつゝ居るのであるから、此儘死んだからと云つて此輪廻が、すつかり解消される筈はないのである。

若し「エネルギーが不滅である」と云ふ事が間違ひないならば、私達の行動に依つて起らした其力も、死の瞬間に於てポツンと無くなつて仕舞ふ筈はない。

風に浮かれた奴が、糸目を切られて漂浪の旅をつゞけ、雨にうたれ風に吹かれ、骨ばかりになつても、尙ほ残骸を洒らして居るやうに、私達と云へども恐らく輪廻して盡くる處を知らず、永遠にさすらいの悲涙乾く暇もないのは明らかである。

思ひを茲に致すとき、誰れ人か、今更乍らに人間生命の謎に驚かぬ人があらう。

(口) 求道への鹿島立ち

眞に人間の謎を解決し、生死の疑問を切りほどこき、正しく人生に徹底したいと念願し得る人は幸せである。

法然上人は九歳の時、父を失なつたのが動機となつて、懐かしい母に別れ、道を求めらるるに至つたのである、然しそれは父の遺言から導かれたものであつた。九歳と

云ふ弱年では恐らく自ら生死の解脱を痛感せられた譯でもあるまい。唯だ悲しき父の死に直面し、尊き父の言葉を深く幼な心に抱きしめて、佛道への研鑽に其の一生を捧げんものと決心をせられたのに過ぎなかつたものであらう。

十五歳で京都の比叡山に登り、源光、皇圓などの碩學に就て佛教を學び、法華三部等の基礎學を一通りすまされる頃、段々人生に對する疑問が深くなり、十八歳の年、黒谷叡空上人の下に報恩藏に入り浸たつて、ひたすら、萬人救はるゝ道なきやを探究せらるゝことになつたと傳へられるが、若き血潮の燃ゆる青年の、此時こそ本當に求道への力強いスタートをせられたのではあるまいか。

私はひそかに拜察して居る。

法然上人は立教開宗に至る間に於て、少くとも五段の轉回をなされて居らるのではないかと。

即ち九歳の出家、十五歳の入山學道、十八歳の隱遁求道、貳十四歳の諸宗碩學歷訪、四十三歳の淨土開宗の五段である。

之が妥當であるかどうかは暫く別としても、佛道は無上道である。堀れば堀る程泉は湧き、汲めば汲む程水は溢れるものである。

上人の念佛に對する眞劍な願心は、實に一生涯を通じて法爾自然に強く深くなり増さるゝ行かれたことであらう。

即ち四修の中の長時修を素直に御體現遊ばされたことと思ふ。

極樂へ今より早く出て立たば

身のおはりには乗りつきなん

の御歌の如き其邊の消息が推察せられるのである。

私達にしても求道心のない者は、淺間しい生活者である。唯だ徒らに不急の些事に
さわぎ立て、其日其日を送迎して居るのに過ぎない。

「此身今生に度せずんば何れの生に向かつてか此身を度せん」

と法照禪師の云はれたやうに、折角人として生きて居る此千載一遇の機會をばづし
て、何れの時に於て、己が永遠の生命に於ける確認が得られるであらうか。

人間としての正しい覺悟と、生命に關する解決とを外にして何の人間生活があらう。
道を求むる爲には「猛火の中をもくぐれ」と昔の人は教へて居る。

私達は今幸ひにして、日本の産んだ最大な大宗教家たる法然上人の御遺誡一枚起
請文に接し得たのである。

是れ何の幸ひぞや。よろしく思ひを此御遺誡の文々句々の中に深く味到せしめて、
求道のよき指南車たらしめ羅針盤たらしめなくてはなるまい。

(第一回終り)

法然上人鑽仰會の經過

佐藤賢順

湖畔の朝霧が冷たかつた。落葉松の林を縫つて風と一しよに朝霧の「散歩」が一通り終ると、富士の頂界線がはつきり浮び出る頃だつたから、もう八月も秋の立つた頃だと憶えてゐる岳麓山中湖畔はもうすつかり秋だつた。大智度論の翻譯に専心してゐる眞野氏を驚かして、湖畔の山莊を訪れた岩野氏、友松氏などが偶然落ち合つて、喧々諤々、話はそれからそれへと何時盡きると思へなかつた。その頃漸く濃厚になつてきた佛教復興の氣運も勿論好話題であつた。「佛教復興の將來はどうなる？」——これが一わたり論じられると、とうとう「佛教復興の將來をどうする？」實踐論に這入つた。佛教復興の氣運が何時まで續くか、これがたとへうつろい易い時世の流行であつたとしても、その流行を一日でも長く續かせることが吾々の責務ではないのか。この傾向が

一時の浮ついた流行から、反省期にはいつて、地道な方向を辿るやうになつた時こそ、ほんとうに佛教の思想と信仰を社會に現代に、生かせなければならぬ時代だ。それには眞に偉大なる具體的な人格を目標とし、その偉大さをほんとうの意味で、強く生かさなければならぬい——。

話のと切れと切れには、明澄な空氣を通して小鳥の聲がハッキリと聞えてきた。

秋になると再々、會合が催された。學界の權威・中堅、教界關係の長老・耆宿、社會教化の第一線に立つ人々など、御多忙の中を代り代り參集を願つて、「何を爲すべきか」に就いての具體的な協議を進めた。その結論が法然上人鑽仰會の設立である。強く一世を指導する爲には、實踐を通して信念を養はねばな

らぬ。實踐は具體的な偉大なる人格を師表としなければならぬ。時代が眞に要求してゐるものは、興味本位の佛教物語ではない。吾々の意識の内奥深く呼びかけてくる偉大な人格の言葉である。僅か三十分の毎朝の聖典講義に、出勤を控えて惴惴として食事を急ぐ勤め人が、斷えて久しく取り戻した事のなかつた「反省」を取戻して、つひ聴き惚れたではないか。現代人は、或る意味では反省を回避してゐるとも言へやう。人格の呼びかけ、意識のめざめ、それこそ時代が秘かに、然し痛切に希求してゐる要求なのである。さて、ところで具體的にして偉大なる人格を何處に求めるべきであらうか。法然上人こそ吾々の知れる最大

の人格である。

鑽仰會設立の發願が同志の間に進められてゐることが一度傳へられると、未だ公には發表してゐないのに、各地方、各方面から精神的物質的の援助が翕然と集つてきた。誠に涙ぐましい献心献財であり内護外護である。献

金も忽ち一萬を突破した。勢力を捧げやうとの篤志は引きも切らない。これも上人鑽仰會なればこそである。諸般の準備を進めてゐるうちに本年にはいつた。準備委員代表者は再三關西方面へ飛んで、關西との提携連絡を計る。一月には愈々實動に移つて、假事務所を開いた。二月十二日遂に機關紙「法然鑽仰」創刊號が出て、會設立の趣旨、會の事業計畫を詳細に發表した。その發送が一通り終ると、各地の經鑽は嵐の如く捲き起つた。「法然上人」のみ名の下、日本全國の同信の和合協力によつて、この聖業が着々と實現されてゆき、同信の發願が次第と成就されてゆく見通しがつき、會の多幸なる將來が約束されたのである。

X X X

事務所の壁には内地各府縣別、それに臺灣・北海道・樺太・朝鮮・滿洲・更に布哇・南洋まで加へて、會員の増加表が貼られた。會員數を赤線で太く示して、會員の増すごとに赤い線が上昇してゆく、寒暖計の水銀のやうに。山口

縣第二位が暫らく續くと、一躍大阪府がぐんぐん伸びて来て、山口縣をリードしてしまつた。その翌日はまた京都府と大阪府の競り合ひが始まる。その翌日ばリードされた山口縣がぐんぐんピッチを上げてくる。それよりも嬉しいのは、布哇・南洋にポツリポツリ赤い點——これは未だ線にはならない——が出来てくることだ。實にこのバロメーターは同信の熱情と意志の測度計である。

X X X

三月一日の夕、「法然」の著者中里山介山氏を招いて色々法然上人を語り合つた時の話を。教團の中に居て、上人の人格に餘り慣れ過ぎてゐる者には、考へ方が型に嵌つて、却つて眞に偉大なる處が見えない。全く純粹に自由な立場に在つて、藝術的直觀を多分に持つてゐる人の話には、傾聴すべき點が少くない。

——もし上人の偉大なる點を現代に生かすとすれば、特にどういふ點を強調したら好いとお考へですか。

「さう——兎に角圓滿と言ひますか、完全と

言ひますか、實に完成されてゐて、特にどの點とも言へないでせう。私は「法然」の中で上人の特色を五つ計り舉げておきましたが、然し何れかの點を一つ取つて、特にそれを強調すれば、完全さが失はれてしまふのでね。例へば上人の強さと言つても、それは決して只の強さではない。何か言ひ張るとか、楯を突とくか言ふ強さでは決してない」

——圓滿といふことを中に持つた強さとも言ひますが、弱さの強さ。

「さうです、さう言つても好いでせう。然し特に現代に生かすとすれば、還愚といふ點でせうね。自分の愚さに目醒めたといふことは、これは大した事です。知識萬能・科學萬能の教育が現代の行きづまりを招いたのですからね。愚癡に還るといふ點は現代に強く教へなければいけないでせう」

——智慧第一であつたからこそ愚癡に還れたのですね。

「さうです、さうです」

三月と言つて春も春はまだ浅く、寒が時々庭の樹々を騒がせてゐた。

編輯後記

創刊號の後記を書くにあたつて感慨深いものがある。

短時日の間にあらゆる事をグソ／＼仕上げていつて、つひに再校を印刷屋に手渡した時、編輯室は思はずお互の眼と眼がかち合ひ、喜びを隠しきれず微聲が口をついて出た。『浄土』創刊號は出たぞ！

こゝに御執筆下された諸先生、諸先輩に厚く御禮を申上げる。

云ふまでもなく、『浄土』は一人のものではない。上人の信仰に生きる萬人の掌にある。

そして誰にも面白く、解ることが要點だ。

その意味から充分の用意を持つて編輯した。

然し日数の不足や色々の點から無理も生じ

充分意のみたない箇所が多々ある。それ等は

巻を追ふてみたすことを約束し、今後の努力

を期待されたい。(一)

◇鑽仰會の發展が素晴しかつただけに、その機關誌『浄土』に對する期待も非常なものであつた。我々はどうしてもその大衆的な要望

に答へなければならぬ。幹部の指導の下に死物狂ひの活躍を續けて、然し出來上つて見た結果は、一般の期待と自分等の自負とに較

べてあまりにかけはなれたものになつたやうな氣がする。これは我々を満足せしめなかつ

たばかりか、鑽仰會に命を打込む人々、それに絶大な期待を持つ人々をも同時に満足せし

めないであらう。然し同人等は思つてゐる。この不滿の中に發展がある。内からと外から

との可憐ない批評は、『浄土』をより良くし、一層大衆的なものとするために缺く可からざる拍車であると。

我々は期待する、『法然上人鑽仰會』を支持するすべての人が、『浄土』を自分のものとして育て上げるだらうと云ふことを。

ともあれ、『浄土』が創刊された有難い因縁に感謝します。(道)

浄 土

昭和十年四月十日 印刷納本
昭和十年五月一日 發行

(定價 金十錢)

品川區南品川四丁目三七八
編輯兼 佐藤 賢順
發行人

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「浄 土」 購讀規定

一部 定價 金十錢 (送料二錢)

半年 金六十錢

法然上人鑽仰會員の一年分の會費中には、本會の機關紙「法然鑽仰」(月一回發行)と「浄土」一ヶ年分の誌代及び送料が含まれてゐます。



御洋服は銀座の

新田へ！

東京市京橋區銀座八丁目
電話銀座(57)〇二九八

全日本の母性に……

御出産から一年間の發育の記録欄と育児法を網羅した寶典

スマートな編輯！ 書きよい上質用紙！

★記事内容

妊娠各月と養生法と胎兒の發育・
妊娠時に多い病氣・産後の手當と心得・授乳
に就て・生後一ヶ月から滿一歳迄各月の育兒
心得・乳兒の罹り易い病氣・お七夜に就て等

母の手に
は必ず！

愛兒の發育を記録して置くと絶好の記念とな
り有事の際の有力な參考となり、又記事欄は
育兒に關する知識を總動員して頗る有益です

(頒布方法)

三錢切手十枚、或は小兒健康藥「宇津救命丸」一貳圓以上の
品の外函を同封して下記へお申込あれば特に送呈致します

育

兒

日

記

一冊 30 銭



本日本京東 社會名合置玉 所行發
一町本區橋

頁〇四二刊六四
刷トツセフオ總

昭和十年四月十日印刷納本
昭和十年五月一日發行（毎月一回一日發行）

淨土 五月創刊號

定價金十錢
（送料二錢）

